

メルコスールにおける主要輸出農産物の生産と市場

平成7年2月

国際協力
サンパウロ

703
84.1
SP
ARY

メルコスールにおける
主要輸出農産物の生産と市場

平成7年2月

国際協力事業団サン・パウロ事務所

農業情報室

メルコスールにおける
主要輸出農産物の生産と市場

27296

JICA LIBRARY



1118426(4)

<平成7年2月>

国際協力事業団サン・パウロ事務所農業情報室

(在サン・パウロ日本国総領事館分室)

703
84.1
SP

SP
JR



13
96

< 目 次 >

1	穀 類	-----	9
1.1	小 麥	-----	9
1.1.1	國際市場動向	-----	9
1.1.2	×16.2-16 年の生産と市場	-----	12
1.2	と ち ち ね	-----	20
1.2.1	國際市場動向	-----	20
1.2.2	×16.2-16 年の生産と市場	-----	23
2.	油脂原料作物	-----	28
2.1	大 豆	-----	28
2.1.1	國際市場動向	-----	28
2.1.2	×16.2-16 年の生産と市場	-----	34
3.	工業原料作物	-----	52
3.1	綿	-----	52
3.1.1	國際市場動向	-----	52
3.1.2	×16.2-16 年の生産と市場	-----	53
4	嗜好作物	-----	62
4.1	コ ー ヒ ー	-----	62
4.1.1	國際市場動向	-----	62
4.1.2	×16.2-16 年の生産と市場	-----	63

5	果 实	-----	65
5.1	りんご及び梨	-----	65
5.1.1	国際市場動向	-----	65
5.1.2	XUJZ-VU に対する生産と市場	-----	68
5.2	かんきつ類	-----	79
5.2.1	国際市場動向	-----	79
5.2.2	XUJZ-VU に対する生産と市場	-----	82
5.3	ぶどう	-----	90
5.3.1	XUJZ-VU に対する生産と市場	-----	90
5.4	アボカド	-----	92
5.4.1	アボカドに対する生産と市場	-----	92
6	牧畜部門	-----	94
6.1	牛 肉	-----	94
6.1.1	国際市場動向	-----	94
6.1.2	XUJZ-VU に対する生産と市場	-----	99
6.2	鶏 肉	-----	101
6.2.1	国際市場動向	-----	101
6.2.2	XUJZ-VU に対する生産と市場	-----	108

< 図表索引 >

表	1	小	全	: 世界の生産	-----	9
	2			: 世界の輸出の推移	-----	10
	3			: 世界の輸出入	-----	11
	4			: 世界の貿易	-----	11
	5			: 世界の小都市の年間成長率実績及び予想	---	11
	6			: アルゼンチンにおける小都市の生産改革と環境推移	-----	12
	7			: アルゼンチンの主要生産地 (90/91年度)	-----	12
	8			: 主要国の収収比較	-----	13
	9			: アルゼンチンの生産推移	-----	13
	10			: ブラジルの生産推移	-----	14
	11			: ブラジルの主要生産改革	-----	14
	12			: メキシコにおける小都市の生産コスト	-----	15
	13			: メキシコにおける小都市の生産消費状況	-----	17
	14			: アルゼンチンの主要輸出先国	-----	18
	15			: アルゼンチンの仕向先	-----	19
	16	とらおろし		: 世界のとらおろし市場	-----	20
	17			: 世界の輸出入	-----	21
	18			: 世界の貿易	-----	21
	19			: 飼料用穀物の成長率予想 (%)	-----	22
	20			: アルゼンチンのとらおろし生産地帯	-----	24
	21			: アルゼンチンにおけるとらおろしの生産改革	-----	24
	22			: 主要輸出国の単収比較	-----	24
	23			: アルゼンチンの輸出先市場	-----	25
	24			: アルゼンチンのとらおろし仕向先 (91/02年度)	---	25
	25			: メキシコにおける生産状況	-----	26

表	26	大豆の輸入状況	27
	27	大豆の油及粕の歩留	28
	28	20年間の大豆生産の推移	29
	29	世界の生産推移	29
	30	世界の大豆(豆)需給	30
	31	世界の大豆油需給	31
	32	世界の大豆粕需給	31
	33	大豆(豆)の主要輸出国及び輸入国	32
	34	大豆油の主要輸出国及び輸入国	32
	35	大豆粕の主要輸出国及び輸入国	32
	36	世界の大豆市場の平均収率	34
	37	アメリカの大豆生産と大豆の割合	36
	38	アメリカの大豆生産の推移	36
	39	アメリカの大豆栽培帯の推移	37
	40	アメリカの大豆生産地(1990/91)	37
	41	主要生産国における大豆の収率比較	38
	42	アメリカの大豆生産の推移	39
	43	アメリカの大豆生産の推移	39
	44	油及粕の収率	39
	45	アメリカの搾油工場数と能力	40
	46	大豆油のコスト構成	40
	47	大豆及び副産物の輸出先市場	41
	48	アメリカの輸出先市場(大豆)	41
	49	アメリカの輸出先市場(大豆油)	41
	50	— — — (大豆粕)	41
	51	大豆及び副産物の価格推移(大豆)	42
	52	— — — (大豆油)	42
	53	— — — (大豆粕)	42

表	54	大豆	： ブラジルの大豆推移	-----	43
	55		： ブラジルの大豆栽培状況	-----	44
	56		： ブラジルの大豆及び大豆製品輸出(重量)	-----	46
	57		： ----- (金額)	-----	46
	58		： ----- (推定値)	-----	46
	59		： パラグアイの大豆生産比 (90/93)	-----	47
	60		： パラグアイの大豆生産推移	-----	48
	61		： 大豆輸出推移	-----	48
	62		： 大豆油輸出推移	-----	48
	63		： アルゼンチンの大豆推移 (大豆)	-----	49
	64		： ----- (ヒマワリ)	-----	49
	65		： メキシコの大豆生産	-----	49
	66		： メキシコの大豆油生産	-----	50
	67		： メキシコの大豆油消費	-----	50
	68		： メキシコの大豆(豆)輸出	-----	50
	69		： メキシコの大豆油輸出	-----	50
	70		： メキシコの大豆粕輸出	-----	51
	71		： メキシコのヒマワリ生産	-----	51
	72		： メキシコのヒマワリ消費	-----	51
	73	綿	： 世界の綿供給状況	-----	52
	74		： アルゼンチンにおける綿の生産推移	-----	53
	75		： アルゼンチンにおける綿の主要生産比率 (90/91)	-----	53
	76		： ブラジルの主要綿の生産推移 (草綿)	-----	55
	77		： ----- (木綿)	-----	55
	78		： ブラジルの主要綿の主要生産比率 (1992)	-----	55
	79		： パラグアイ国における綿の生産状況 (92/93)	-----	57

表	80	綿	: バラアライムおよび綿の生産推移	58
	81	'	: バラアライムの繊維産出推移	59
	82	'	: バラアライムの繊維産出先市場	60
	83	'	: ヌルコスールの繊維生産	61
	84	'	: ヌルコスールの繊維産出	61
	85	'	: ヌルコスールの繊維産入	61
	86	コ-ヒー	: 世界の輸出国々交換	62
	87	'	: ブラジルのコ-ヒー生産推移	63
	88	'	: ブラジルのコ-ヒー生産推移	64
	89	'	: ブラジルのコ-ヒー輸出推移	64
	90	'	: ブラジルのコ-ヒー輸出先市場	64
	91	果 実	: リンゴ-南半球の供給状況	66
	92	'	: 梨-南半球の供給状況	66
	93	'	: リンゴ-世界の生産と輸出	67
	94	'	: 梨-世界の生産	67
	95	'	: リンゴ-アルゼンチンの栽培面積	68
	96	'	: 梨-アルゼンチンの栽培面積	69
	97	'	: リンゴ-アルゼンチンの生産と出荷先	70
	98	'	: アルゼンチンの輸出推移	71
	99	'	: アルゼンチンの輸出先市場	71
	100	'	: 梨-アルゼンチンの生産と出荷先	72
	101	'	: アルゼンチンの輸出推移	73
	102	'	: アルゼンチンの輸出先市場	73
	103	'	: ブラジルのおよびリンゴの生産推移	74
	104	'	: ブラジルのリンゴ栽培面積	74
	105	'	: ブラジルのリンゴ輸出推移	75
	106	'	: ブラジルのリンゴ輸出市場	75

133	:	:	世界の牛肉輸入量と主要輸入国	92
134	:	:	×1002-1011 世界の牛肉の1人年間推定消費量	99
135	:	:	世界の牛肉の飼育数	102
136	:	:	世界の牛肉の飼育数と主要国	102
137	:	:	世界の牛肉の生産量	103
138	:	:	主要国と世界の牛肉の推定消費量	104
139	:	:	主要国と世界の牛肉の1人年間消費量	104
140	:	:	牛肉: 主要5ヶ国の輸入と輸出	105
141	:	:	牛肉: 主要国の輸入と輸出	106
142	:	:	牛肉: 主要国の輸入と輸出	106
143	:	:	牛肉: 国際価格の変動	107
144	:	:	ブラジルの牛肉の輸入と輸出	109

1. 穀類

1.1 小麦

1.1.1 国際市場動向

小麦は世界の基礎食糧の需要は1つに2つ世界の穀物取引量の50%を占めている。80年代の生産・消費量は年率1.7%の増加を続けた。90年代の当初3年間は再び世界の平均生産量は557百万トンを、消費量は547百万トン、貯蔵量は99百万トンであった。この間世界の小麦平均は2%の増加を記録した。

例として80年代前半の小麦在庫の増加と不況時期(86/87年)は80年代で最も高いレベル(世界の消費量の33%)に達しており、これは理由として低価格の時代に形成した期間にある。この間穀物取引の増減は輸出国・輸入国の11ヶ国に集中した。中でも最大の輸出国は、80年代前半の1.7%/haと21.5%/haに伸びた。80年代後半は特徴として世界的レベルでの新産と消費量の減少による世界の在庫を増大させた理由があった。

小麦生産の増加は穀物取引の革新に負っているが、大抵は各国の政府が行った生産奨励策が主要な役割を果たした。大半の国において小麦の生産者に対する直接価格や補助金、価格制限の下で行われた肥料、農薬等の補助金、低利の融資、輸上のための恩典措置等が挙げられる。米国やECは特に積極的な農業政策を推し進めた。

またこの時期は1987/88年以降、今日の11ヶ国間の取引は、同年以降国際価格の回復により世界の在庫の調査が行われ、ECは再び補助金削減の義務が行われた。特に1985年の国合の逼迫は食糧生産の増加により、小麦の在庫を減少させた。小麦生産者に対する補助金の削減は、穀物市場の移行に因る方法の採用による。

主要国においては政策の悪化、経済格差の拡大に伴う世界の消費の増加と、小麦の在庫の減少は顕著な消費量の23-24%のレベルを維持し、現行の供給均衡の状況にある。

表1 小麦：世界の生産

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
中国	85.8	85.4	90.8	98.2	96.0
EC	71.4	74.7	78.6	84.7	90.0
CEI	83.8	84.4	92.3	108.0	77.2
インド	49.3	46.2	54.0	49.7	54.5
米国	57.4	49.3	55.4	74.5	53.9
東ヨーロッパ	39.9	47.8	43.2	41.1	38.3
カナダ	26.0	16.0	24.4	24.4	32.8
オーストラリア	12.4	14.1	14.3	15.4	10.0
アルゼンチン	8.8	8.4	10.2	10.5	9.0
その他	72.2	77.4	73.9	30.5	83.9
計	501.5	500.7	537.1	537.0	541.6

1.1.2' xiv コス-iv に およぶ生産と市場

1) 生産

< アルゼンチン >

アルゼンチンの小麦栽培地帯は、パンプー地区の全般にわたっている。中でもブエノスアイレス州南部及びウーゲンに広がる地帯と、サンタフェ州南部、ブエノスアイレス州北西部、コルドバ州西部が中心地帯である。このうち地帯は、大豆と小麦の輪作形態をとるが、最近大豆栽培が開始されたブエノスアイレス州南部では、単一栽培の形態をとる。ヒマワリ、大豆から小麦、新しい作物として、カボチャと競合する。

表 6 アルゼンチンにおける小麦の栽培と生産

州 別	1982/84 平均		1989/91 平均	
	作付面積 1000ha	比率 (%)	作付面積 1000ha	比率 (%)
ブエノスアイレス	3998.9	59.2	3151.2	56.7
サンタフェ	1069.5	15.8	842.5	15.2
コルドバ	748.7	11.0	655.0	11.7
パンプー	624.1	9.2	606.2	10.9
その他	317.5	4.7	300.5	5.4
合計	6758.4	100.0	5555.5	100.0

出所: J.N.S

表 7 小麦: アルゼンチン生産地 (90/91 表)

州 別	作付面積 1000ha	収穫面積 1000ha	生産 1000t	収量 kg/ha
ブエノスアイレス	3433.2	3302.9	6,555.7	1,984
サンタフェ	935.2	891.1	1,936.3	2,123
コルドバ	829.1	767.5	1,254.5	1,624
パンプー	728.1	610.8	858.7	1,406
ミナシマ	132.1	115.0	210.8	1,833
サンタマリア	33.8	33.0	49.5	1,500
サンタコ	27.0	22.0	33.0	1,500
サンタロ	8.8	13.4	21.4	1,597
ブエノスアイレス州	11.0	19.5	14.3	1,362
その他	39.8	31.3	57.4	1,333
合計	6,758.1	5,797.5	10,991.6	1,896

出所: J.N.S

上表にみられる通り、ブエノスアイレス州が全国生産の 50% を占めている。サンタフェ、コルドバ、パンプー、ミナシマ、サンタマリア、サンタコ、サンタロ、ブエノスアイレス州、その他が占めている。主要な州の国内生産の割合は 88% である。

小麦はアルゼンチンで栽培される穀物の中で主要な作物の一つである。1980年代平均の全国穀物栽培面積の 28.4%、生産量 29.3% を占める。

1. Pilsener 小麦の播種は冬期に行動するが、国内各地の土壌気象条件が小麦の栽培に適合している故、播種時期は長し、東北地方は約5月13日、2/2 Pilsener 南部、7月下旬～8月上旬に収穫する。収穫は11月に開始し、1月上旬に終了し、南半球の小麦は当年4半期から後半の収穫期にあり、高圧の市場に出回ると利益は薄くなる。

2. Pilsener 小麦は小麦の原料となる Trigo Par. と Trigo Fino (又 Tr. Canadense) の2種があり、その中で大半は Trigo Par. の生産地 (1.1/17 - 1.1/21 及び 1.1/21) の80年代始め、17.6 g/ha (199 = 15 kg) の90日付のものは、19.0 g/ha 増加して、2000年1980/85年比は 22.3 g/ha 最高の記録を示した。Low 全般に肥料の使用量が少く、肥料を大量に用いる他の輸出国と比較すると低い水準にある。Pilsener 小麦の肥料使用量は栽培面積の全体の 20% (800 t ~ 1,000 t/ha) 程度にすぎない。

表 8 小麦：諸国の収水比較

国別	1989/90	1990/91	1991/92	平均
EU	4.83	5.14	5.25	5.10
米 国	2.20	2.66	2.31	2.39
カナダ	1.80	2.27	2.26	2.11
Pilsener	1.86	1.91	2.00	1.92
オーストラリア	1.58	1.63	1.48	1.56

出所: USDA

表 9 小麦：Pilsener 生産推移

年度	作付面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	生産量 1,000t	収水 t/ha
1980/81	3,555.9	4,601.7	7,615.4	1,655
81/82	6,227.4	5,709.4	8,125.6	1,423
82/83	7,008.0	6,924.1	14,609.8	2,108
83/84	6,989.9	6,901.7	12,195.3	1,767
84/85	5,991.3	5,942.5	11,250.7	2,230
85/86	5,728.1	5,296.9	8,661.8	1,635
86/87	5,089.2	4,956.7	8,904.9	1,796
87/88	4,889.5	4,784.2	8,385.1	1,962
88/89	4,837.8	4,707.1	8,475.6	1,800
89/90	5,650.3	5,419.8	10,293.6	1,899
90/91	6,178.1	5,797.5	10,991.6	1,896

出所: JNA

上表は JNA (穀物庁) のデータに基づき、過去10年間の小麦生産推移を示す。上表は、1980年以降の栽培面積及び生産量の大幅な変動が認められる。80年代の始め、Pilsener 小麦の

に際して行われた米国の米の経済制裁から、ソ連がフルゼンに穀類を求めて陸路に
 表方面積の増大があるため、米の肉体的修復や国際価格の下落に伴う需要規模の増
 加が期待される。

① 73VU

表 10 小麦：73VUの生産推移

年度	表方面積(1,000ha)	生産(1,000t)	収収 kg/ha
1983	1,885.0	2,265.3	1,201
84	1,741.3	1,954.5	1,123
85	3,626.7	4,320.3	1,645
86	3,564.2	5,689.7	1,472
87	3,455.9	6,034.6	1,746
88	3,467.6	5,738.0	1,655
89	3,281.4	5,552.8	1,692
90	2,680.9	3,093.5	1,154
91	1,994.8	2,921.3	1,464
92	1,975.0	2,796.0	1,428
93	1,356.7	2,323.6	1,713

出所：1996

73VUは小麦の小麦市場は長期にわたって国内需要に供給不足が不足し、その大半を海外
 に依存する状態に陥り、80年代の中期に不況に陥り国内産奨励金の付与による保護が
 導入された。80年代後半に、600万トンの近い生産量に達して自給能力に及
 び、一歩の成長に達した。しかし、90年代に入ると穀物の取扱に阻害を及ぼす政府の
 政策の緩和の進展、小麦取引の自由化による生産者の収入の減少と再び生産規模の縮小に
 及びした。XIVコソル中から最大の消費国である最大の輸入国である

国内の生産量の南極州（ロシア、ウクライナ、トルコ、及びトルコ）南極州の中心地として
 中央部は高品質の小麦、トルコ、トルコ州と生産量に及ぶ。その5州で合計生産量99%に及ぶ。

表 11 小麦：73VUの生産推移

州	1991	1992	1993
ロシア	1,825.9	1,573.0	1,023.0
ウクライナ	682.7	780.9	1,015.4
トルコ	107.5	104.4	116.6
トルコ	141.8	102.0	73.1
トルコ	155.9	116.4	70.1
その他	11.5	11.2	25.4
計	2,921.3	2,685.9	2,323.6

出所：1996

4) 市場

XILO 2-10 における小學市場は 國內に 南米諸國の輸入国 PULVTV と 南米諸國の輸入国 プラチ
 ンに 合意 2.1% 大規模輸出 2.1%、当然 プラチンと PULVTV に 主要供給国 2.1%、PULVTV の プラチ
 ンに 主要供給 2.1%

XILO 2-10 XULV 国の 提出したデータと比較すると XILO 2-10 の 主要市場に 対する 割合は 3%
 主要消費地は プラチ 2.3%、西米輸出 9%、主要輸入 1.3% に なる。

80年代の 統計と 比較して 南米諸國 (プラチン 及び プラチン) の 自給率 が高くなったと 見られる。
 中でも プラチン 政府の 輸入管理 政策の 結果 として 2010年 向うの 統計 倍増、増産
 270% 向上した。 2010年代 後半の 統計 以降、 傾向は 中断して 生産は 下降し 再び 輸
 入に 依存する形 となる。

1997年 以降も 同様の 傾向の 視察は 輸入 への 減少、 輸出 への 増加 である。
 國內の PULVTV に 対し 輸出 国 である。 PULVTV の 生産、 及び 輸出 への 圧倒的 な 位置に
 あり、 FAO の 統計 によれば 80年代 後半の XILO 2-10 全体 生産 割合の 58% 生産 64%、 輸出 9.
 9% に なる。

この 傾向は XILO 2-10 の 中で 圧倒的 な 立場に PULVTV の 小學部門に 対して 今後の 市場 統合の
 更に 有利な 条件に なる (他の 原因 がある)。 更に PULVTV に 対する 小學栽培の 反復 プラチンに
 しても 高い 生産 がある。 プラチン 及び 1997年 以降の 生産 規模の 拡大 (異なった 比較 対象
 と なる)。 更に 生産 コスト PULVTV 国 の 中で 最も 低く 国際競争力 を 持つ 2.1% である。
 2010年代 後半の 國內の 市場の 一部 の 確保 である。 2.1% 生産 7.1% PULVTV の 小學 作
 業 生産 2.1% である。

表 12 XILO 2-10 における 小學の 生産 統計

品名	PULVTV	プラチン	US\$/ha
大豆	60.81	65.27	46.96
大豆 残	13.13	85.16	118.58
種子	20.71	44.64	
計	94.65	165.07	165.44

出典: SAQP-ARGENTINA.

國內の 大豆 工業 成長 2.1% プラチンと PULVTV に 対し、 國內 大豆 加工 90% 2010年代 後半

占められた。ブラジルの農産物加工 = 1 級年向 年向 6 万 7 千 トン 肉の 前年比 + 20% 増
物の全面的に国内市場への供給に向かっている。ブラジル国内の小麦物産の価格に急激な変動
が常に見られる。加工品価格も急激に高くなる。

ブラジル、ブラジル及びその他の農産物 - 某部門の比較表と表 2.11.1

- 製造コストはブラジルが他国に比べても高い。
- 特にブラジルの製造コストは低い賃金及び社会保障費のコスト全体の 8.89% である。ブラジル
の場合に 22.62% と高い。
- 加工最終製品の価格はブラジルが最も低い。これは原料小麦の価格が他国に比
較して低いためである。
- シンガポールに 26 の製粉工場が 7 月 1 日 1987 年の製造能力を有している。そのうち 4 工場
が国内製造能力が 36% を占める。
- ブラジルの製粉業界は 70 年代に行動した小麦の生産効果に早稲米に転換した。近代化
された。現在国内には 183 の工場があり、大型 53 工場 (1日 30 万 トンの製造能
力を持つ) と 130 の中小工場 (1日 25 万 トンの製造能力を有する) がある。
年向の製造設備能力は 900 万 トンと推定されている。
- マレーシアの中小麦の輸入国である。過去には小麦の輸入、製粉工場の供給面は政府
の補助が行われていた。ブラジルへの補助は完全に撤廃された。マレーシア
市場は供給の補助の必要性を失った。思われる。
- 現在ブラジルの小麦輸入に 20% の肉税の課税がある。ブラジルへの輸入に
対して特恵肉税の制度が設けられた。94 年未了の全廃された。ブラジル
国内には 1 年 200 万 トンとブラジルへの輸入は急激に減少した。
- 小麦物の輸入に 20% の肉税の課税が設けられた。ブラジル、マレーシア
肉には 1 年 200 万 トンと急激に輸入が減少した。

FAO のデータにもとづいてマレーシアの小麦市場は急激に減少した。

表 13

X16JZ-W10-1043 小麦の生産と消費

国 別	1980/82		1989/90		増減 %
	1,000ha	%	1,000ha	%	
収穫面積					
アムセバシ	4,919	62	4,939	58	-
ブラスル	2,623	33	2,145	27	20
クルグアイ	281	4	191	2	- 32
バウグアイ	59	1	236	3	299
計 (A)	7,878	100	8,510	100	8
世界計 (B)	23,864	-	22,514	-	- 6
A/B	3.30	-	3.78	-	-
生産量	1,000t	%	1,000t	%	%
アムセバシ	7,752	74	10,188	64	31
ブラスル	2,246	22	9,809	30	114
クルグアイ	375	4	421	3	12
バウグアイ	63	1	473	3	656
計 (A)	10,436	100	15,891	100	52
世界計 (B)	46,468	-	54,794	-	19
A/B	2.26	-	2.90	-	-
収 収	Kg/ha	X16JZ-W10 比較 (%)	Kg/ha	X16JZ-W10 比較 (%)	(%)
アムセバシ	1,587	20	1,887	1	19
ブラスル	887	- 33	1,506	-19	70
クルグアイ	1,335	1	2,176	17	63
バウグアイ	1,047	- 21	2,006	7	92
計 (A)	1,325	-	1,867	-	41
世界計 (B)	1,935	-	2,431	-	26
A/B	- 31.5	-	- 23.2	-	-
消費量	1,000t	%	1,000t	%	%
アムセバシ	3,804	35	5,563	29	46
ブラスル	4,694	61	6,297	50	- 6
クルグアイ	291	3	315	2	8
バウグアイ	148	1	475	4	222
計 (A)	10,936	100	12,650	100	16
世界計 (B)	46,156	-	54,763	-	19
A/B	3.37	-	2.31	-	-
輸出量	1,000t	%	1,000t	%	%
アムセバシ	3,949	98	4,625	98	17
ブラスル	1	0	1	0	33
クルグアイ	87	2	112	2	29
バウグアイ	0	0	0	0	-
計 (A)	4,036	100	4,738	100	17
世界計 (B)	10,328	-	11,222	-	8
A/B	3.91	-	4.26	-	-

出所: FAO

輸出品	1000ト	%	1000ト	%	%
・PULP	0	0	0	0	0
ブ>ソウ	4499	98	1489	99	-67
ソウ>ソ	2	0	6	0	143
ソ>ソ>ソ	85	2	3	0	-97
計(非)	4536	100	1498	100	-67
計(計)	102172	-	111043	-	8
%	440	-	135	-	-

出所: FAO

輸出の増加は、国内市場の需要の減少と、PULPの需要の増加による。PULPの需要の増加は、大型輸送機、船舶、航空機の製造による。国内市場の需要の減少は、PULPの需要の減少による。PULPの需要の減少は、PULPの需要の減少による。

輸出の増加は、国内市場の需要の減少と、PULPの需要の増加による。PULPの需要の増加は、大型輸送機、船舶、航空機の製造による。国内市場の需要の減少は、PULPの需要の減少による。PULPの需要の減少は、PULPの需要の減少による。

表 14

小計: PULPの輸出先国

1000ト

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
ブ>ソウ	1063.9	928.9	1635.9	1819.3	2889.0
ソウ>ソ	433	440.0	479.3	307.1	562.6
中国	808.9	304.1	113.1	749.8	440.9
インドネシア	240.7	190.2	10.0	308.2	375.6
イ>ソ>ソ	496.6	722.6	659.6	1469.7	359.5
フィリピン	2.5	90.8	49.8	118.8	168.9
タイ	23.7	23.5	8.7	1.5	148.2
ミ>ソ>ソ	-	-	-	104.3	193.1
コロンビア	-	62.4	99.5	11.4	58.9
日本	541.1	632.4	609.1	466.1	31.7
トルコ	-	-	69.7	449.6	-
その他	606.7	221.0	616.9	59.5	307.0
計	4197.9	3671.9	4351.6	5847.4	5544.4

出所: UNCTAD

国内市場への需要は、輸出の増加の大部分を吸収する。輸出の増加は、国内市場の需要の減少による。

80年代の統計によると、輸出の増加は、国内市場の需要の減少による。輸出の増加は、国内市場の需要の減少による。

輸出は平均より、80年代は、90年代始めは約4200万ト前後である。

表 15 小計: PIVUの傾向 1,000ト

年度	国内生産量	工場の出荷量	輸出品
1986/87	9,000	9,065	9,030
87/88	9,000	3,957	7,197
88/89	8,360	3,900	3,905
89/90	10,298	9,136	9,952
90/91	10,959	9,131	5,866
91/92	9,204	9,313	5,544

出所: NUMERO ESTADISTICO.

市場への出荷は、2月と3月は、P4に収獲時期を中心として、1/4半期に集中する傾向がある。これは最近では、収獲時期の出荷集中度が低く、販売時期が拡大している。これは次の理由によるものと考えられる。

- 輸出先国の多様化により、収穫期の時期も従来のように1/4半期に集中せず、長期にわたる時期に及ぶ。中でも最大の輸出先市場である中国の輸入自由化、各種規制の緩和が影響している。
- 生産者の貯蔵能力の増加、中でも生産中心地であるプリス、ピウス南部地方の貯蔵能力の拡大は、市場の好否に依り、出荷の柔軟性を高める。
- 1990年以降、プリス、ピウスとロシアの両取引市場は、約2トに達するものの輸入の先物取引量は基本的に増大している。

輸出先市場の80年代は、基本的な変化がなかった。これは、相対的にECの補助金の輸出に利用する速度や中国の輸入の減少と、反面、南米諸国、中でも近隣諸国の輸出が増加している。小計輸出の60%を占めることになる。

1.2.1 国際市場動向

とりもろくは南米途上国における米と小麦の次に基礎食糧とされているが、先進国も含む世界の全体の消費量は5億の1億4千万の食用とす。残りは家畜飼料として消費されている。

飼料用作物の中で小麦が最大の消費量であり、これは20年間以上の栽培技術の向上による収量の増加による比率の高まりである。91/92年度における世界の小麦の生産量は980万トンを達し、飼料用作物供給量の50%以上を占めた。この飼料用作物のうちの比率は輸出の割合は更に高く、世界の輸出の70%に相当する600万トンを達している。

小麦のとりもろくは市場は、そのほとんどが同一の品種である。輸出余力を持つ国は少ない国に限られており、中では米国のとりもろくは生産量の世界生産の40%以上、輸出の70%以上を占める。小麦は、小麦の最大の生産国であるが、国内消費が大きいので、輸出余力は生産量に対してそれほど高くはない。小麦のとりもろくは世界市場への供給国の立場にあり、アメリカのとりもろくは世界市場への供給比率は、生産量に対して2%、輸出量に対して9%である。

表 1 世界のとりもろくは市場

国別	生産		輸出	
	100万ト	%	100万ト	%
米 国	189.9	39.6	99.0	66.3
中 国	95.0	19.8	8.0	13.3
EU諸国	10.5	2.2	5.9	9.2
その他	184.3	38.4	6.4	10.6
世界計	479.7	100.0	69.3	100.0

出所 USA

高率の全般的に、同一の品種傾向があるが、世界の消費国の中で1日1億の連日、その需要は大きくなる。EU圏の大豆消費量は、輸入は減少傾向にあるが、76/77年度は150万トンの輸入を行っており、今日では300万トンを消費する。国内生産の拡大は、その結果である。EU圏の林用と共通農業政策により、飼料用作物の生産奨励と、炭化水素補助が行われ、結果は、その結果である。

80年代の前半は世界の供給量増加率と消費量増加率とを比べると、EU圏は、EU圏世界の在庫は増加し、価格も低下し、その結果、1982/83年の在庫と消費の比率は80年代よりも高く、価格は最低を記録した年である。

表 17

とらぶろ : 手取の採出入

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
米 国	49.5	51.3	60.0	44.5	49.0
THAILAND	3.7	2.5	2.5	3.7	5.9
中 国	9.1	3.7	2.5	6.6	8.0
南アジア連邦	0.6	2.0	3.5	9.8	9.8
其 他	9.7	1.4	1.3	1.3	9.8
計	3.1	2.9	3.1	3.2	9.8
(PLANTATION %)	56.7	63.8	72.9	69.1	69.3
	6.5	3.9	3.4	6.2	9.8
(輸入国)					
日 本	16.7	15.9	16.0	16.0	16.2
EUROPE	8.1	19.5	19.4	11.5	11.3
韓 国	5.0	5.7	6.1	5.6	6.0
ASEAN	3.2	3.2	5.0	1.8	1.0
EUROPE	3.7	2.9	4.1	3.7	2.0
合 計	4.2	9.2	5.3	5.3	5.7
其 他	16.2	13.9	18.9	16.2	18.1
計	57.1	65.3	74.8	69.1	69.3

出所: USDA

表 18

とらぶろ : 手取の供給

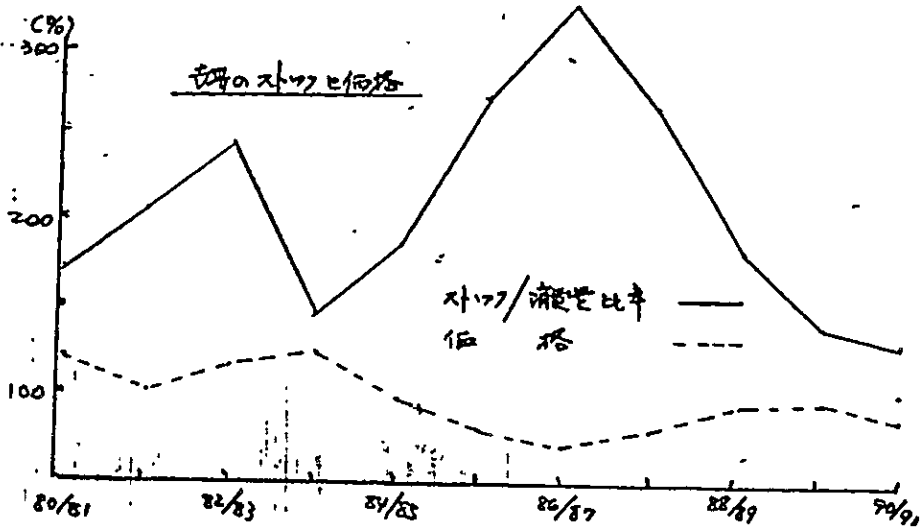
100万t

年度	期首在庫	生産量	計	消費量	輸出品	期末在庫	変化/前年度
1982/83	70.0	408.6	508.6	417.9	63.4	106.8	25.6
83/84	106.8	346.1	452.9	412.8	49.7	49.1	9.7
84/85	49.1	457.1	497.2	436.4	66.7	69.8	13.9
85/86	69.8	489.0	549.8	420.1	53.8	121.4	28.9
86/87	121.4	474.3	595.7	459.9	55.4	161.0	35.2
87/88	161.0	419.1	610.1	464.2	55.7	149.0	31.5
88/89	149.0	409.3	549.3	459.4	63.8	87.0	18.9
89/90	87.0	460.2	547.2	476.3	72.9	79.9	14.9
90/91	79.9	477.6	548.5	464.7	69.1	81.9	17.5
91/92	81.9	462.0	543.9	479.7	74.8	-	14.8

出所: USDA

手取のとらぶろ供給の一部は同じ品種の生産量に比べて供給の減少傾向が、国内の消費量の増加傾向と一致して減少傾向にある。80年代にはとらぶろ供給の増加傾向は、83/84及び88/89年に相対的に減少傾向が顕著であり、国内市場に供給不足傾向にある。又、1985年に相対的に減少傾向にある供給量は、とらぶろ供給の

抑制する。この国際相場上昇の要因は、90年代における世界的な世界消費量に
対する小麦の割合が16%前後で、80年代に達して35%と大増、下回っている



現在の世界における市場の状況は、次の通りである。

- 供給と需要の均衡が保たれ、価格は、数年間上昇傾向にある
- 世界の生産と輸出は依然として少数の国に集中している
- 世界の取引における小麦の割合は、小麦の割合よりも大増する補助の向きの正味の
11%の増減である。小麦の割合の増加は、小麦の割合の減少と、飼料部門の補助の減少による国の輸入減
少傾向が明らかである。

今後の市場状況として、主要な国々の飼料作物全体の今後の見込みは、供給不足である。

小麦は、飼料作物に欠ける部分に占める割合は、飼料作物全体の需要に順応しているものと
考えられる。

上記主要国の需要は、90年代における生産の増加率、80年代よりも増加率が消費
量も増加するとの見込みが均衡的である。消費の増加に伴って輸出も増加が見
られる。更に、GATTのジュネーブにおける農業部門交渉、小麦の補助の削減と、
国の生産の減少による需要の減少、小麦の市場に有利に反映する傾向がある。

表 19 飼料作物の政策手続 (%)

区分	1970/80	1980/90	1990/2000
生産	2.6	1.2	2.0
消費	2.6	1.4	1.9
輸出	8.6	0.3	2.9

出典: BANCO MUNDIAL

メロコニウ園地唯一の輸出地である。沖を主要輸出産物の1つとして、

メロコニウの生産と市場は地産地消である。

メロコニウの輸出状況

メロコニウはメロコニウ産地である最大の飼料作物で、同様にホウレンソウ飼料作物全体の70%、穀類生産の18%を占める。メロコニウは春から夏にかけて栽培され、その栽培地帯はメロコニウ産地の全域に広がるが、中でもメロコニウ・メロコニウ 沖、メロコニウ南部、メロコニウ東部及びメロコニウ沖が栽培中心地帯とされている。播種は9~11月、収穫は3~5月に行われる。

表 20 メロコニウの輸出状況

州別	1982/84 平均		1989/91 平均	
	面積(1000ha)	比率(%)	面積(1000ha)	比率(%)
メロコニウ・メロコニウ	1,031.2	31.1	843.3	38.9
メロコニウ	816.6	24.7	665.3	21.2
メロコニウ	521.6	15.7	321.0	14.6
メロコニウ	249.0	7.5	244.8	11.1
その他	691.0	20.9	319.7	14.6
計	3,308.4	100.0	2,194.1	100.0

出典: JNQ

メロコニウの輸出は、メロコニウ・メロコニウの全国生産の3割に相当する。メロコニウは、メロコニウ・メロコニウの全国生産の75%に相当する。栽培面積は、大豆の栽培面積に匹敵するが、減少傾向が続いている。生産性は、新品種の導入により向上している。1ヘクタールあたりの収量は、80年代前半の3000kgから、現在4,200~4,500kgに達している。

表 21 メロコニウの生産状況

項目	77/81	90/91
作付面積 1000ha	3,400	2,400
収量 1ha 99/ha	32.8	43.9
生産量 1000t	9,500	8,800

出典: JNQ

メロコニウの収量は、大豆の収量に匹敵するが、大豆の7t/haと比較すると、11%程度の差が生じている。

表 22 メロコニウの生産国別の収量比較

国別	1989/90	1990/91	1991/92
米	7.32	7.44	6.82
中国	3.88	4.52	4.58
メロコニウ	3.06	4.00	4.38
その他	2.93	2.81	2.73

出典: USDA

生産物の仕向先

海外市場への輸土量は国内生産量と消費量の規模によって決定する。国内での工業用、飼料用穀物、及び農産物による消費される。91/92年度におけるトルセル4への輸出量は約6,500千トンの600千トンの消費を待たず、その全額は穀類輸土額14%、輸土総額5~7%に相当するものとして推定される。

トルセル4への輸出市場は一進一退を繰り返す年々による変化が大きい。昔はECが最大の輸土先市場と見られていたが、80年代にECが採用した国内への飼料作物生産の増加計画により海外依存を減少し、これに代って、国際情勢、政治情勢を理由として、Y連や他の買付先が増加した時期もあった。90年代に入ると新しい市場の出現による輸土先の変化が続いている。

表 23 トルセル4への輸出先市場 (%)

国別	1984/85	1990/91
旧ソ連	31	0
EC	20	14
イタリヤ	11	19
オーストラリア	5	0
ブラジル	0	5
ペルー	0	8
エジプト	0	3
その他	33	51
計	100	100

出所: S.A.G.P

国内市場における工業用と飼料消費量は年間の平均1.5~1.8百万トンの範囲にあり、農産物の消費は2.5~3.0百万トンの範囲に推定される。

表 24 トルセル4への輸出先市場の仕向先 (91/92年度)

区分	数量 1000ト	比率 (%)
生産量	10,500	100.0
輸土量	6,500	62.0
種子使用量	50	0.5
工業原料		
配合飼料	900	8.5
澱粉化	700	6.6
穀物	150	1.4
農産物の消費	2,200	21.0

出所: S.A.G.P

表 25

とびきり = U : X102-109 統計状況

国 別	1986	1987	1988	1989	1990
1) 収量面積 1,000ha					
TIVOLYN	3351	2,900	2,438	1,520	1,826
ブロンル	12,460	13,503	13,182	12,919	11,395
ブルグアイ	96	88	79	99	61
パングアイ	376	567	486	500	518
X102-109計	16,263	17,058	16,180	14,988	13,600
ナリ -	105	87	90	125	101
ホリビア	320	302	293	279	261
計	16,688	17,447	16,563	15,392	13,962
世界計	128,337	125,983	127,378	129,298	129,116
2) 生産量 1,000t					
TIVOLYN	12,400	9,250	9,200	9,260	5,049
ブロンル	29,541	26,803	24,748	26,590	21,298
ブルグアイ	92	104	118	60	112
パングアイ	969	1,001	961	1,000	1,139
X102-109計	33,502	37,158	35,027	31,910	27,598
ナリ -	721	617	661	938	823
ホリビア	538	481	456	375	325
計	34,761	38,256	36,144	33,223	28,746
世界計	485,066	458,028	400,263	470,646	475,429
3) 生産性 kg/m					
TIVOLYN	3700	3,190	3,779	2,803	3,105
ブロンル	1,649	1,985	1,877	2,058	1,869
ブルグアイ	1,200	1,185	1,592	1,228	1,667
パングアイ	1,245	1,766	1,978	2,002	2,200
X102-109計	1,949	2,032	2,305	2,023	2,210
ナリ -	6,886	7,121	7,318	7,529	8,140
ホリビア	1,680	1,591	1,553	1,344	1,245
計	2,727	2,806	3,015	2,827	3,038
世界計	3780	3,636	3,142	3,640	3,682
4) 消費量 1,000t					
TIVOLYN	5,027	5,264	4,984	2,358	2,031
ブロンル	22,766	27,673	24,779	26,796	21,997
ブルグアイ	112	161	152	119	152
パングアイ	469	1,001	961	996	1,137
X102-109計	28,379	34,099	30,876	30,269	25,337
ナリ -	775	753	872	1,002	905
ホリビア	538	482	758	368	303
計	29,687	35,334	32,206	31,639	26,545
世界計	485,972	458,112	400,149	469,846	477,966

出所: FAO.

表 26

輸出額 : XILVX-W の輸出状況

国 別	1986	1987	1988	1989	1990
1) 輸 出					
PLVWV	2,374	3,987	4,217	1,903	2,998
73VW	0	1	1	0	0
7IV7T1	0	0	5	0	0
1737T1	0	0	0	4	2
XILVW	2,374	3,988	4,223	1,907	3,000
T11-	0	0	3	19	8
7117	0	0	0	7	2
計	2,374	3,988	4,226	1,933	3,030
合計	57,641	64,445	66,486	77,253	71,264
2) 輸 入					
T1WV7V	1	1	1	1	0
73VW	2,225	871	32	206	699
7IV7T1	20	57	39	59	40
1737T1	0	0	0	0	0
XILVW	2,246	929	72	266	739
T11-	54	136	214	83	90
7117	0	1	2	0	0
計	2,300	1,066	288	349	829
合計	58,547	64,529	66,378	76,953	73,801

出所: FAO

2. 油脂原料作物

2.1 大豆

2.1.1 国际市场动向

1991/92 麦季に於ける世界の大豆生産量は、105.7 百万トンを推定される。このうち世界の 8 大油脂作物（大豆、棉、落花生、ヒマワリ、菜種、亚麻、ココヤシ及びアブラムシ）生産量の 50% に占められる。

大豆の搾油率の上昇に伴って大豆油の食用用途、又その副産物としての大豆粕は飼料原料として用いられる。大豆は他の油脂原料作物より蛋白質の含有率が厚く、粕の歩留りも高い。大豆の油の割合は生産量に他の作物に劣る。世界の平均として大豆の搾油歩留率は油が 15%、大豆粕が 67% である標準である。

表 27 8 大油脂作物と大豆の油及び粕の歩留り率 %

品名	1987/90	1990/91	1991/92
大豆油	14.8	15.2	15.6
8 大油脂平均	21.2	21.2	21.1
大豆粕	64.9	66.7	67.1
8 大油脂平均	52.1	52.4	52.7

出所: FAO

油脂原料作物別の油及び粕の生産割合は、油では大豆 27%、アブラムシ 19%、菜種 16%、ヒマワリ 12%、棉 7%、粕では大豆 57%、菜種 13%、棉 11%、ヒマワリ 7% の割合である。このうち大豆の生産量の割合は大豆の 40%、大豆粕は搾油歩留率 57% に占められ、1992 麦季に於いて 71.6 百万トンの生産が行われた。これは世界の食油の割合大豆の比率 27% に比べて大豆生産は 91/92 麦季に於いて 16.5 百万トンを占めた。

世界の大豆生産面積は 67~77 年間に 47% の大幅な増加をみられ、77~87 年間に 4.7% の増加をみられた。生産量は 67~77 年間に 32% の向上をみられ、77~86 年間に 18% の上昇をみられた。

世界の生産量の中は中国の生産量が最大で、77~78 年及び 78~79 年には 1 割を占めた。世界の供給量は 20 年間に大幅な増加をみられ、1967 年に中国の生産量は 65% を占めたのが 87 年には 53% に減少した。77~78 年の生産量は 172 万トンのうち、中国は 120 万トン、インドは 25 万トン、712 万トンの生産をみられた。

表 28

20年間の大豆生産の推移

国	面積 (100万ha)			生産量 (100万t)			収収 t/ha		
	1967	1977	1987	1967	1977	1987	1967	1977	1987
大陸別									
アメリカ	31.7	32.8	38.2	39.2	64.0	80.1	1.2	1.9	2.1
ソ連	1.6	15.9	12.0	1.2	14.7	15.4	0.7	0.9	1.3
ヨーロッパ	0.1	0.3	1.0	0.1	0.4	2.4	0.9	1.3	1.3
その他	0.1	0.2	0.4	0.1	0.1	0.4	0.7	0.6	1.0
計	33.5	49.2	51.6	40.6	79.2	98.3	1.2	1.6	1.9
地域別									
米国	16.1	23.3	22.8	26.5	47.9	51.8	1.6	2.1	2.3
ブラジル	0.6	2.0	2.2	0.7	12.5	16.9	1.8	1.8	1.8
中国	14.0	14.2	8.4	11.1	12.9	11.8	0.8	0.9	1.4
その他	0.1	0.7	2.2	0.1	1.4	7.8	1.2	2.1	2.0

出所: FAO

大豆の生産は、20年間の間に減少した。そのうちブラジルとアメリカの増加が顕著である。一方、中国の大豆生産は、20年間の間に減少した。これは、中国の大豆生産が、20年間の間に減少したためである。一方、中国の大豆生産は、20年間の間に減少した。これは、中国の大豆生産が、20年間の間に減少したためである。

20年間の間に大豆の生産は低下したが、米国の農業政策の中で、大豆の生産は奨励された。これは、大豆の生産が、1:1の比率で有利な価格で買収されたためである。一方、中国の大豆生産は、20年間の間に減少した。これは、中国の大豆生産が、20年間の間に減少したためである。一方、中国の大豆生産は、20年間の間に減少した。これは、中国の大豆生産が、20年間の間に減少したためである。

表 29

大豆: 世界の生産推移

100万t

年度	米国	ブラジル	中国	アメリカ	その他	計
1982/83	59.6	14.8	9.0	42	60	93.6
83/84	49.5	15.5	9.8	20	64	83.2
84/85	50.6	18.3	9.7	6.8	26	93.0
85/86	57.1	14.1	19.5	20	8.0	92.0
86/87	52.8	17.3	11.6	20	8.3	98.0
87/88	52.8	18.1	12.5	9.7	10.7	103.8
88/89	42.2	23.2	11.7	6.5	12.1	95.6
89/90	52.4	20.3	19.2	19.8	13.4	107.1
90/91	52.4	15.5	11.0	10.8	13.3	103.0
91/92	54.0	18.5	9.6	10.5	13.3	105.7

出所: USDA

表 31

大豆油：世界の需給

年度	期首在庫	生産量	計	消費量	輸出量	期末在庫	対需/消費 (%)
1982/83	10.5	13.6	24.1	13.3	3.8	1.5	11.6
83/84	11.6	12.8	24.4	13.0	4.0	1.3	9.8
84/85	9.8	13.3	23.1	13.1	3.7	1.4	10.6
85/86	10.4	13.9	24.3	13.5	3.2	1.7	12.2
86/87	12.2	15.2	27.4	14.8	3.9	2.0	13.4
87/88	2.0	15.2	17.2	15.0	3.8	2.1	14.0
88/89	2.1	14.6	16.7	14.8	3.7	1.7	11.5
89/90	1.7	15.9	17.5	15.6	4.0	1.8	11.5
90/91	1.8	15.9	17.7	15.9	4.6	1.8	11.3
91/92	1.8	16.5	18.3	16.0	3.8	2.0	12.8

出所：USDA.

表 32

大豆油：世界の需給

年度	期首在庫	生産量	計	消費量	輸出量	期末在庫	対需/消費 (%)
1982/83	2.8	60.5	63.3	59.8	23.3	2.5	9.2
83/84	2.5	55.2	57.7	55.6	21.4	3.1	5.6
84/85	3.1	58.1	61.2	59.0	22.3	2.7	9.6
85/86	2.7	61.1	63.8	61.8	23.1	2.9	4.6
86/87	2.9	67.2	70.1	67.6	26.0	3.1	9.6
87/88	3.1	67.6	70.7	67.6	25.2	3.5	5.2
88/89	5.2	63.9	69.1	65.9	24.8	3.2	9.9
89/90	3.2	69.5	72.7	69.1	26.1	4.0	5.8
90/91	9.1	69.7	73.8	70.9	26.7	3.7	5.2
91/92	3.8	71.6	75.4	72.4	26.9	3.3	4.6

出所：USDA

国際市場における大豆の供給は地理的に異なり、その地域は行方不明である。一方にはブラジルとアメリカの供給は、その四半期に行方不明な大豆の生産量と同様に、その四半期の水産用油と供給と関係する。その三大供給国の中でアメリカは大豆油、ブラジルは大豆粕、中国は大豆(豆)の最大の供給国である。大豆及び副産物の輸出は民間部門による行動であるが、政府特許の関与がある。需要例としては日本やECにおける大豆(豆)及び大豆粕の輸入は民間部門による行動である。大豆油の場合、国内の供給は不足が生ずる場合、政府が介入する可能性がある。大豆油の取引は、その補給の不足と損失の融資の取戻しである。中国はECP(輸出保証プログラム)のECにおける農業補助金の代表的例である。

大豆、大豆油及び大豆粕の世界の諸輸出国及び諸輸入国の過去55年間の比較は、後述の通りである。

表 33

大豆(豆)：世界の産出国及び輸入国

100万ト

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
米 国	21.9	14.4	17.0	15.2	18.8
ブラジル	2.7	9.8	3.9	2.6	3.0
アルゼンチン	2.1	0.5	3.1	9.9	2.7
パナマ	1.3	2.0	1.6	1.0	1.5
中国	1.5	1.2	1.1	1.0	0.8
その他	0.6	0.7	0.7	0.9	0.6
計	30.1	23.5	27.4	25.0	27.1
(輸入国)					
E C	13.6	11.1	13.3	12.9	13.3
日本	4.8	4.3	4.7	9.9	4.6
台湾	2.1	1.7	2.1	2.0	1.9
C E I	1.4	0.7	0.7	0.6	0.8
その他	7.2	6.0	6.0	6.1	2.3
計	29.1	23.7	26.7	25.9	22.9

出所: USDA

表 34

大豆油：世界の産出国及び輸入国

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
米 国	0.9	0.8	0.6	0.4	0.7
ブラジル	0.6	0.7	0.9	0.7	0.5
アルゼンチン	0.8	1.0	1.0	1.1	1.2
E C	1.2	1.0	1.1	1.1	1.3
その他	0.3	0.3	0.3	0.4	0.4
計	3.8	3.7	3.9	3.6	3.9
(輸入国)					
E C	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6
米 国	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
インド	0.4	0.0	0.0	0.0	0.1
中国	0.2	0.4	0.5	0.5	0.4
フィリピン	0.7	0.8	1.0	0.9	1.0
タイ	1.7	1.7	2.0	1.8	1.7
計	3.6	3.5	4.0	3.8	3.8

出所: USDA

表 35

大豆粕：世界の産出国及び輸入国

100万ト

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
ブラジル	7.3	8.7	9.9	8.2	7.7
米 国	4.2	4.9	4.3	5.0	5.8
アルゼンチン	4.0	4.8	4.8	5.6	6.1
E C	3.8	3.5	3.8	3.7	3.7

中国	2.3	1.6	1.6	2.3	1.5
其他	1.0	1.5	1.7	2.1	2.2
計	24.6	25.0	26.0	26.8	27.0
(輸入国)					
E C	12.6	12.1	13.4	13.9	13.6
C E 1	3.0	4.0	2.6	3.0	3.0
東ヨーロッパ	2.8	3.1	2.8	2.9	2.8
ソ連	2.3	2.3	2.4	3.2	3.0
トルコ	1.8	1.8	2.1	1.8	1.9
その他	1.5	1.5	1.3	1.5	1.5
計	25.3	26.4	25.9	27.7	27.1

出所: USDA.

国際市場の動きの中で、1980年代の崩壊後、主要産国が大豆及び大豆粕の需要を補うべく、莫大の大豆市場に走った。又 EC での大豆及び副産物の輸入に注力し、大豆及び大豆粕の輸入税を撤廃した。大豆油は既に 10% の課税措置にとどまっている。

現在の国際大豆市場の動向は次の通りである。

- 1) 米国の農業政策は大豆の生産の増加を促進する。同国の穀物生産は大豆の生産比率は低下した。その後 1990 年の農業法改正で従来の措置の一部を改正し大豆畑の拡大を奨励する。補助金の改善に伴い EC 諸国の中で大豆油の含有率を比較して最高の復活をみたした。
- 2) 南米大陸は大豆の生産の拡大は大豆の主要産地である。南米の供給国として世界の規模を拡大し、ブラジルとパラグアイを中心とし、小規模な大豆の生産国が大豆の増加した。この国の大豆は大豆の主要産国である。この中でパラグアイは大豆油の生産者である。又パラグアイは大豆粕の生産者として国際市場の価格に影響する。輸出規模は存在する。
- 3) 大豆の価格決定は大豆の需要と供給の大豆粕の取引量の最近数年の増大傾向にある。1980年代の政治的、経済的危機の一部は大豆の問題に影響した。

国際市場の見通し。

国際市場は大豆の生産の見通し、油脂作物全体の市場と関連している。植物油及び大豆の需要は人口の増加、所得の向上、低所得層の食習慣の変化によって大きく影響する。世界の人口、動物蛋白の消費量は地域別に大きく異なり、かつ経済レベルの高い先進国諸国では肉類と卵類の消費レベルが高いため、健康と長寿のため栄養という面から動物蛋白の利用

に減少したとの見解がある。

他方世界の人口の80%は蛋白質を食料としており、肉類と同様に肉類の増加傾向がみられ、中国や旧ソ連国に於いては肉類の増加傾向が顕著なところから、蛋白質の大豆の需要は年々増加するものと思われる。肉類の食用の増加は肉類と同様に消費を急進的に高めるための設備に達しないからである。90年代は世界の大豆の中心地である南米が部分的に変化することから、大豆の需要は急激に増加するものと思われる。

大豆の需要増加の期待は、大豆の生産の増加、大豆の生産方法の改良、大豆の利用率の向上などによる。ECの場合には大豆の生産は増加するが、大豆の利用率は減少する。また、他の諸国に於いては大豆の需要は増加するが、大豆の生産は減少する。また、大豆の生産の増加は肉類の増加と同様に肉類の増加傾向がみられる。

大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加、大豆の生産方法の改良、大豆の利用率の向上などによる。90年代は大豆の生産は増加するが、大豆の利用率は減少する。また、他の諸国に於いては大豆の需要は増加するが、大豆の生産は減少する。また、大豆の生産の増加は肉類の増加と同様に肉類の増加傾向がみられる。

大豆の世界市場は、大豆の生産の増加、大豆の生産方法の改良、大豆の利用率の向上などによる。90年代は大豆の生産は増加するが、大豆の利用率は減少する。また、他の諸国に於いては大豆の需要は増加するが、大豆の生産は減少する。また、大豆の生産の増加は肉類の増加と同様に肉類の増加傾向がみられる。

表 36 世界の大豆市場、年別成長率 (%)

	1970/80	1980/90	1990/2000
生産	6.9	1.8	2.8
消費	6.2	2.2	2.9
輸出	9.9	2.5	1.7

出所: 豆類

2.1.2 大豆の生産と市場

1) 概要

1992/93年度は世界の大豆生産量は117億トンと推定され、93/94年度は110億トンと推定される。

世界の生産のうちから米国の生産が最も多い。92/93 農年における世界の生産の50%を占める。ブルゴリア、ブラジル、ウルグアイ及びパラグアイは構成国として、米国の2-10%の生産を占める。93/94 農年における米国の生産は減少すると予想されている。ブラジル及びブルゴリアの生産は増加を期待しているが、世界の大豆生産には米国の2-10%の比率は増大が見込まれる。相対的にブラジル及びパラグアイの中国の生産と同様の減少が見込まれる。国内消費の拡大は輸出余力を減少させ、他の3国は異なる立場にある。

大豆の副産物の中で大豆油の場合、米国の2-10%の世界生産を占める比率は92年度における25%、世界の貿易量に占める比率は50%である。大豆粕は米国の世界の生産量及び貿易量に占める大豆油の場合と同様の比率を有している。

米国の2-10%の生産を占める油脂原料作物の中で大豆は次に重要な作物と見做され、世界の生産に占める比率は原料、油及び粕の11のうちにおける18%である。米国の2-10%の中で7割及び副産物の輸出を行なっている。世界の貿易量に占める油は米国の50%、粕は米国の66%を占める。国際価格は左右する力を持っている。

亜麻仁肉及び亜麻油の需要は石油副産物の押された影響で生産は低調である。米国の2-10%の生産を占める比率は低く、油及び粕の両方とも高価格で取引される。米国の2-10%の中でブルゴリアは生産国として高生産を占める。同様の傾向にある。

世界の油脂作物の中で大豆油は最も多い。穀物作物はオリーブである。その生産量は増加傾向にある。

ロ) 米国の2-10%の油脂原料作物部門

米国の2-10%の構成国の中で最大の大豆生産国はブラジルである。92/93 農年における2億5千万トンの生産があり、93/94 農年の収穫は史上最高の24億5千万トンと予想されている。10%最近数年間の成長率は停滞しており、80~92年間の生産増加分は米国の2-10%の生産の11%を占める。ブラジルの6%に過ぎず、以前に最高の成長を示したブルゴリアの22%と比較的である。

大豆油は肉及びブルゴリアとブラジルの合計で米国の2-10%全体の99%を占める。この部門は米国の過去5年平均の生産増加分はブルゴリアに占める最も多い。ブラジルの生産は減少傾向にある。米国の2-10%は世界の最も多い生産を増加している地域である。

メキシコ-同別の生産市場動向は次の通りである。

(1) 大豆の生産

大豆は、Tibetの最大の油料作物であり、国内の油料作物に占める割合は最大である。国内の油料作物全体の50%を占め、60~70%の国内需要を、又残額を

輸出する。

表 27 Tibetの大豆生産と国内需要の割合 %

年 度	作付面積	生産量
1980年代平均	17.6	20.2
1981/82	10.1	12.4
1991/92	24.1	28.3

出所: SAGP

Tibetの大豆栽培は70年代の中期から拡大を始め、70年代後半には主要な作物として、80年代に入ると更に拡大した。80年代の前半には、小規模な栽培が最大の生産規模を占めていた。品種の改良や栽培技術の向上により、国内の各地に適切な栽培方法の導入と、栽培面積の拡大が図られている。

表 28 大豆: Tibetの生産統計

年 度	作付面積 1000ha	収穫面積 1000ha	生産量 1000t	収率 kg/ha
1980/81	1,777.3	1,733.7	3,578.5	2,064
81/82	2,109.2	2,057.5	4,258.7	2,069
82/83	2,201.9	2,103.3	3,648.6	1,734
83/84	2,761.0	2,746.0	6,883.1	2,506
84/85	3,402.4	3,381.2	6,560.5	1,940
85/86	3,375.8	3,333.7	7,055.2	2,116
86/87	3,554.9	3,448.4	6,628.6	1,922
87/88	4,208.7	4,156.5	9,558.3	2,299
88/89	4,716.8	3,944.0	6,526.8	1,655
89/90	5,093.2	4,918.6	10,666.7	2,169
90/91	4,966.9	4,782.5	12,873.5	2,274

出所: JUS - SAGP

輸出面積は、大豆は全体の90%以上を輸出する。大豆の輸出は、副産物の輸出と同様に、大豆油の輸出も重要な役割を果たしている。大豆の輸出は、国内の大豆需要を補うだけでなく、国際市場での競争力も高めることに貢献している。

大豆部門は、政府の施策により、輸出税の軽減や、大豆(豆)の輸出税の

大豆の割合が高、減少してきて、この政策は原料の輸入輸出も加えて作付面積の輸出に頼つてきたのが、ECが大豆の両作物に課税課税輸入税1.53コト高と相殺の目的も合致して、この関係は大豆の1983年以降減少して、84年に15%、今日では6%に減少してきている。

大豆の産地帯

大豆の産地帯は大豆栽培の10%の地帯で、直径250kmの円形の面積で行なわれている。この地帯は、フランス、ドイツ、及びイタリア各州で合致しており、この3州の国内生産量の93%を占め、その中心地帯はドイツである。この産地帯は大豆と穀物生産物の70%を占める。その市場は、ドイツの市場に依存して増減する。

表 39 TUVVに於ける大豆栽培の帯 82/84 ~ 89/91 年比

州別	1982/84 平均		1989/91 平均	
	栽培面積(1,000ha)	播種率(%)	栽培面積(1,000ha)	播種率(%)
フランス	996.7	92.2	1,964.3	39.9
ドイツ	556.5	23.6	1,238.3	25.1
イタリア	587.5	24.9	1,297.4	26.3
その他	216.7	9.3	925.0	8.6
計	2,357.0	100.0	4,925.0	100.0

出所: JNG

表 40 大豆: TUVVの産地帯 (1990/91)

州別	作付面積 1,000ha	水灌面積 1,000ha	産量 1,000t	収率 t/ha
フランス	1,987.0	1,934.5	4,643.8	2,400
ドイツ	1,313.0	1,264.4	2,799.0	2,214
イタリア	1,250.0	1,185.3	2,642.3	2,229
フランス	95.5	95.5	216.8	2,270
イタリア	83.0	83.0	190.9	2,300
フランス	72.5	72.5	145.0	2,000
ドイツ	59.8	51.0	81.8	1,604
フランス	50.0	50.0	76.5	1,530
イタリア	30.0	18.0	27.0	1,500
その他	31.1	28.3	50.4	1,781
計	9,966.9	9,782.5	19,873.5	2,274

出所: JNG - SA9P.

最近 播種改良の結果、大豆栽培はフランス、ドイツの南部で行なわれるようになった。この地帯は小麦と大豆の栽培的作物である。現在この大豆栽培面積は拡大している。

2024年同州の全国統計と比較して、高めの値。

播種時期と収穫時期の地域による差、又前期栽培と後期栽培による差、前期栽培は9月末に播種が行われ、後期栽培は11月の中期に小豆の収穫直前に行われる。東北地方には12月の降雨の多さによる影響がある。収穫は前期の場合4月末から5月始めに開始され、後期は6月に開始される。栽培面積は前期の80%程度である。

アメリカ合衆国における大豆の収量は最近3年間の平均(4)に比べて、2.24トン/ヘクタールで概ね同水準にある。ただし、1.70トン/ヘクタールである。最近数年間の大豆の収量の増減は、栽培地の高い前期栽培の面積の増加によるものと見られる。前期栽培の平均収量は2.5トン/ヘクタール、後期栽培の平均収量は1.8トン/ヘクタールである。

表 4-1 栽培地における大豆の収量比較

国名	89/90	90/91	91/92	平均
米国	2.17	2.29	2.30	2.25
アメリカ	2.17	2.40	2.20	2.24
ブラジル	1.78	1.63	1.85	1.76

出典: USDA

アメリカ合衆国における大豆栽培の拡大は、アメリカの自然条件(基本的に中西部より中西部東部、ブリス、アメリカ北部に多い)が大豆栽培に適していること、小豆作の補完作物として小豆-大豆の組合せによる高い収益が得られることによる。

アメリカの油糧原料作物の生産量、輸出量は大豆に次ぐ。ヒマワリは春から夏の播種に始まり、播種される。また、ブリス、アメリカ西部及び南部に主産し、小規模なコロンビア、ヒマワリ、及びアフリカでも栽培されている。栽培面積は、秋播の停滞により、90/91、栽培面積は2.3億ヘクタールである。含有量が多いため、高収量の品種の導入により、70年代に栽培面積が拡大し、80年代には油糧作物全体の60%程度に達した。最大の播種時期は、70年代の前半に大豆栽培の拡大を押し止めた2位の規模である。

アメリカ合衆国における大豆の栽培は、大豆の生産の進捗である。

表 42

ヒマワリ : プルサンチン 生産推移

年度	作付面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	生産量 1,000t	収水 kg/ha
1980/81	1,449.1	1,374.7	1,381.2	1,005
81/82	1,664.8	1,620.8	1,861.7	1,149
82/83	2,016.6	1,973.8	2,335.9	1,183
83/84	2,099.3	1,947.7	2,180.5	1,119
84/85	2,344.7	2,305.8	2,289.8	1,426
85/86	3,180.2	2,992.8	3,991.8	1,334
86/87	2,045.9	1,767.2	2,157.3	1,221
87/88	2,162.7	1,977.7	2,875.5	1,454
88/89	2,268.9	2,125.7	3,133.3	1,474
89/90	2,794.4	2,574.2	3,758.4	1,449
90/91	2,372.4	2,301.2	4,033.8	1,753

*注: JN9 - SASP.

表 43

ヒマワリ : プルサンチン 生産推移 (90/91)

作物別	作付面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	生産量 1,000t	収水 kg/ha
ソラマシ、アムズ	1,326.5	1,311.0	2,350.9	1,793
コムギ、トウモロコシ	300.1	284.4	568.4	1,998
サトウ、アムズ	293.1	278.6	451.8	1,622
アムズ、アムズ	250.5	247.9	414.8	1,677
アムズ、コムギ	101.6	83.6	115.4	1,380
アムズ、アムズ	60.4	59.4	92.4	1,556
その他	40.2	36.8	40.1	1,089
全国計	2,372.4	2,301.2	4,033.8	1,753

*注: JN9 - SASP.

プルサンチン 代表的油用原料作物として大豆及びヒマワリの仕向先は国内の工業加工原料としての消費が大半。前期農年度に種子として作付された割合が3%。残りの20%は海外市場に輸出された。其中、大豆の輸出割合は生産量の25% ヒマワリは7%である。

大豆及びヒマワリの栽培拡大は必然的に榨油工場への能力を増大させた。プルサンチンと大豆の油用原料、90%は大豆とヒマワリによる5%以下である。工業加工の結果として大豆の油及び粕の86-92%以内平均生産量は次の通りである。

表 44

油及び粕の生産量

作物別	生産量 1,000t	
	油生産量	粕生産量
大豆	1,180	5,170
ヒマワリ	1,290	1,320

表送りの油は80%、粕は95%は輸出に向かっている。

国内榨油工場の設備能力は80年代前半90年代前半に始まる急激な増大を遂げた。1977年当時の年産3万トン程度の能力は80年代前半に7万トン、92年には15万トンに増大した。

諸国。大豆油は中東及びTOP、大豆粕はヨーロッパ及び旧ソ連圏に主として輸出される。輸出入の増減は、大豆の需給に連動する。

表 47 大豆及び副産物：アムステルダム輸出実績 1000t

年度	大豆(豆)	大豆油	大豆粕
85	2,986.8	524.7	2,352.1
86	2,604.5	669.1	3,275.2
87	1,291.9	724.5	3,622.5
88	2,096.3	896.7	4,521.1
89	429.8	760.1	4,521.0
90	3,258.7	1,245.8	5,157.2
91	4,405.6	1,008.2	5,803.2

表 48 大豆(豆)：アムステルダム輸出実績

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
フランス	-	1,043.9	233.1	1,270.6	1,721.5
イタリヤ	77.9	368.4	52.5	341.1	477.0
スペイン	-	-	-	296.1	496.9
ドイツ	891	133.0	55.8	347.7	355.5
ソ連	237	194.9	-	127.6	298.7
ブラジル	-	-	-	-	251.3
その他	1,110.1	356.6	28.4	875.6	804.7
計	1,291.8	2,096.3	429.8	3,258.7	4,405.6

出所：JVA

表 49 大豆油：アムステルダム輸出実績

輸出先国	1988	1989	1990	1991
イタリヤ	97.0	188.0	355.0	194.7
中国	24.1	52.0	159.5	179.0
インドネシア	77.2	60.4	123.7	121.8
インド	-	20.0	-	71.4
ドイツ	-	11.4	25.2	49.9
ソ連	76.9	31.8	86.4	99.7
その他	561.5	396.5	496.0	341.7
計	896.7	760.1	1,245.8	1,008.2

出所：JVA

表 50 大豆粕：アムステルダム輸出実績

輸出先国	1988	1989	1990	1991
フランス	963.2	1,242.7	1,473.6	1,852.5
スペイン	78.7	28.1	176.6	555.5
旧ソ連	1,868.9	1,633.7	703.2	484.9
ドイツ	212.8	147.8	299.3	420.6
イタリヤ	203.7	127.8	375.4	398.0
その他	1,193.8	1,340.9	2,109.5	2,091.7
計	4,521.1	4,521.0	5,157.2	5,803.2

出所：JVA

表 51

大豆及副産物の価格推移 : 大豆 (円)

年度	米 国 平均価格	ソソノ 林.ソソノ FOB	ソソノソソ ソソ.ソソノ FOB	ソソソソソ CIF
1980/81	272	287	277	310
81/82	219	243	231	253
82/83	224	242	228	260
83/84	275	284	275	301
84/85	209	215	209	223
85/86	187	196	195	211
86/87	180	192	193	209
87/88	245	274	262	282
88/89	261	261	264	292
89/90	212	218	209	247
90/91	209	214	207	241

表 52

大豆油

1980 81	501	494	492	545
81 82	418	493	434	463
82 83	455	494	422	463
83 84	673	685	682	722
84 85	650	609	598	625
85 86	397	342	347	377
86 87	339	302	310	324
87 88	499	400	399	443
88 89	465	411	412	435
89 90	491	420	424	438
90 91	463	418	415	454

表 53

大豆粕

1980/81	240	247	239	273
81/82	202	212	198	225
82/83	206	213	200	224
83/84	208	203	200	221
84/85	138	141	139	155
85/86	171	175	171	183
86/87	179	179	177	191
87/88	243	239	238	254
88/89	257	241	238	259
89/90	191	181	178	204
90/91	187	178	171	198

出所: SAGI.

2) ブラジル

ブラジルにおよび大豆卸内は60年代の中期に政府の採用による農業の近代化と積極的
な輸出政策の故に発展し今日では最大の輸出項目として外貨の獲得に貢献している。特に

大豆の政府の政策の故に大量の買入れ工業卸内にも低下し、70年代前半には大豆の
原料輸出の形態は加工品に多少の増加傾向、輸出への転換というが、今日では副産物(搾り
油)の大豆輸出の主力となっている。

原料大豆の生産は80年代を通じて100万ha前後の規模に達しており、年間20
百万tに近づく生産量に達し、このうち80/81年度には24百万tの記録を残している。平均収
率は1t/ha程度に低く、過去10年間で1ha当たり2tに達するまで9/92年1月
の収穫であった。

国内の大豆生産は南部地方に伝統的に集中し、9/92年度には全国的に大豆生産の
約半分以上を集中する。中でもパラナ州のバレンシア地方は、大豆の生産に力を入
れ5百万t以上を生産する国内最大の大豆生産地帯である。これは従来のセーララ地方と
中西部地方の生産地帯の伸びであり、9/92年度には全国的に40%近くを収穫している。

従来、大豆の生産地帯は中部の主要大豆生産地帯に合意し、中南部地方に集中してこ
る。大豆の生産地帯の改良と、最近の収穫の北進による、国内の大豆生産地帯の意図的
な70年代後半から80年代前半に、大豆の生産地帯はパラナ州南部地方(パルメイラス)や
80年代後半から最北端の大豆生産地帯と、マツピラ州南部地方(パルメイラス)等の
例があり、更に最近には新しい大豆生産地帯として、PRONEX (セーララ開発計画)の
おかげで、トカンティニ州に大豆の生産が記録され始めた。

表 54

大豆：ブラジルの生産推移

年度	収穫面積 1000ha	生産量 1000t	平均収量 1t/ha
1981/82	8,202.2	12,835.0	1,565
82/83	8,136.5	14,582.0	1,792
83/84	9,016.7	15,535.8	1,650
84/85	10,153.9	18,278.6	1,800
85/86	9,181.6	13,730.2	1,452
86/87	9,134.3	16,968.0	1,858
87/88	10,520.0	18,016.2	1,713
88/89	12,211.2	24,071.4	1,971
89/90	11,481.1	19,887.6	1,732
90/91	9,618.3	14,938.1	1,553
91/92	9,435.7	19,184.9	2,033

表 55

ソビエト大豆栽培統計 (1991/92)

地域及州別	作付面積 1000ha	収穫面積 1000ha	生産量 1000t	収水 18%
北部地区	3.0	6.9	11.2	1636
東北部				
ハ イ ヤ	329.0	329.0	489.0	1300
ツ = ヨ ヴ	21.2	21.2	24.0	1138
計	341.2	341.2	504.0	1478
中西部				
マシト・ゾロフ	1059.2	1453.7	2642.7	2506
ツ・ゾロフ・ツ・ゾロフ	949.0	940.8	1871.2	1989
ゴ ヤ ス	825.3	822.9	1797.7	2185
エ ア ケ	42.0	42.0	92.8	2209
計	3275.5	3259.4	7404.4	2172
南東部				
イタ・ゾロフ	490.3	471.7	974.0	2065
ナ・ゾロフ	465.6	465.6	853.8	1834
計	955.9	937.3	1827.8	2009
南部				
ウ・ゾロフ・ツ・ゾロフ	2876.9	2876.6	5629.5	1957
ハ イ ヤ	1810.6	1810.6	3440.5	1900
エ ア ケ	205.3	203.7	367.3	1803
計	4892.8	4890.9	9437.3	1930
全国計	9474.4	9435.2	19184.9	2033

出所: 1995

国内工業加工施設能力は約35百万トンの搾油と2百万トンの前処理能力を有する。大豆は主に国内市場に供給される。大豆の消費量は、主に国内市場に供給される。大豆の消費量は、主に国内市場に供給される。大豆の消費量は、主に国内市場に供給される。

工業加工は、大豆油の生産に80%、国内市場に供給し、残りの20%は海外に輸出される。大豆油の生産に80%、国内市場に供給し、残りの20%は海外に輸出される。大豆油の生産に80%、国内市場に供給し、残りの20%は海外に輸出される。

輸出は主に大豆油であり、20万トンに達する。大豆油の輸出は、主に大豆油の輸出である。大豆油の輸出は、主に大豆油の輸出である。大豆油の輸出は、主に大豆油の輸出である。

輸出先は主に大豆油であり、大豆油の輸出は、主に大豆油の輸出である。大豆油の輸出は、主に大豆油の輸出である。大豆油の輸出は、主に大豆油の輸出である。大豆油の輸出は、主に大豆油の輸出である。

表 56 ブラジルの大豆及び副産物輸出 (数量) 1000t

年度	大豆 (t)	大豆粕	大豆油
1981	1,450	8886	1,282
82	500	7,953	549
83	1,295	8,493	1,071
84	1,561	7,587	928
85	3,491	9,588	954
86	1,200	6,666	391
87	3,024	7,802	988
88	2,577	8,129	680
89	4,618	9,871	891
90	4,077	8,744	795
91	2,008	7,487	513
92	3,739	8,501	669

出所: CACEX, SESEX

表 57 ブラジルの大豆及び副産物輸出 (金額) 100万円

年度	大豆 (t)	大豆粕	大豆油	計
1981	409	2,163	651	3,112
82	123	1,668	379	2,170
83	309	1,793	461	2,563
84	459	1,460	651	2,569
85	363	1,175	602	2,140
86	243	1,198	138	1,579
87	570	1,450	304	2,324
88	728	1,892	294	2,914
89	1,138	1,950	395	3,483
90	910	1,610	321	2,841
91	445	1,369	208	2,022
92	812	1,595	265	2,672

出所: CACEX, SESEX

表 58 ブラジルの大豆及び副産物輸出先市場 (1992年)

大豆		大豆粕		大豆油	
輸出先国	100万円	輸出先国	100万円	輸出先国	100万円
フランス	294.1	フランス	484.2	イタリヤ	25.2
スペイン	129.7	フランス	264.2	バングラデシュ	46.1
日本	95.4	イタリヤ	180.0	パキスタン	42.9
ベルギー	64.0	スペイン	141.9	中国	42.5
ドイツ	52.9	ハンガリー	90.4	ドミニカ	15.1
イタリヤ	50.7	ドイツ	69.5	フランス	12.3
英国	38.3	ベルギー	55.3	インド	19.4
その他	76.3	その他	309.9	その他	11.4
計	812.9	計	1,595.9	計	264.9

出所: CACEX, SESEX

3) パラチア

パラチア国の大豆栽培は 1960年代に日本移民者によって導入され、水害に新しい分野であるが、パラチアのパラチアに隣接する東部地方の自然条件が栽培に適し、海外市場の需要が高まったことにより急速に拡大し、80年代の中期に 100万トンの生産規模に上った。90年代に入ると 200万トンに達し拡大を続けている。パラチアの南部でも一部で栽培が、パラチアの北西部地方と東部の地方の一大大豆栽培地帯の一部を形成している。24万トンのパラチアの 1万トンのパラチアと比較して小規模の栽培地帯のパラチア国は、ほとんど輸出の作物として、重要な外貨獲得源である。

国内の生産地帯は、日本移民者のパラチア東部の北西部地方と東部の地方に集中し、この2地区で国内生産の 85% が占められている。土地生産性は高く 92/93 年産には 1ヘクタール当たり 2.8 トンの収量を達成し、パラチアのパラチアに倍している。栽培上の問題点として、生産単位が小さい栽培地帯の改良の余地が乏しく、残存しているが、土地の保全に努める必要がある。機械化栽培が普及しているが、土地の保全の危険が大きい。また、販路の問題として、国内産品の輸出先は、パラチアのパラチア港) までの距離が遠く、輸送コストが高くなる。これらの不利な面を克服するために、生産物の品質を高く、蛋白、油脂、糖質、含有量など他の国の産品と比較して高く、国際市場に有利な高品質の大豆を栽培し、これらの利点を活かしている。

表 59 大豆：パラチアの主要産地 (92/93)

果 別	栽培面積 1000ha	生産量 1000t	収量 kg/ha
(東部地方)			
イタチ	255.7	777.9	3042
アイト	252.7	742.6	2938
カンパニ	59.0	125.5	2326
カアグアス	23.9	51.6	2159
アマンバ	17.1	37.6	2199
サニ、アード	21.0	36.4	1735
カアサバ	9.5	19.7	2079
パラチア	9.4	9.9	2250
アイト	9.3	9.5	1860
コンセプト	0.2	0.4	1905
その他	0.2	0.4	-
(西部地方)	0.0	0.0	-
全国計	635.0	1793.5	2825

出所: M. A. S.

表 60 1977年国大豆推移

年度	面積 1,000 ha	総量 1,000 t	収率 kg/ha
1985/86	539.0	662.3	1.229
86/87	674.0	1,178.6	1.749
87/88	766.0	1,407.9	1.837
88/89	851.0	1,614.6	1.897
89/90	900.0	1,794.6	1.994
90/91	552.6	1,032.7	1.869
91/92	594.8	1,192.1	2.004
92/93	635.0	1,793.5	2.825

出所: ESTIMACION DE LA PRODUCCION AGROPECUARIA

国内大豆の採油工場は、棉と大豆の搾油料としての採油加工が行われていた。工場数は比較的少ないが、大豆の集中度は高く、全体の90%は最大の工場1社(MARANGATU)が国内大豆の取引の70%を占有了採油工場である。又工場の半数は精製工程を持つ最終商品大豆製造を行っていた。他は専ら粗油と20%程度の豆粕の製造能力約410千ト、原料は大豆51%、棉32%その他17%を割合である。大豆の採油供給量は73%は国内市場、11%は輸出、残りの16%は輸送に用いた。

表 61 1977年国大豆採油推移

年度	重量 1,000 t	金額 100万円	平均単価 us\$/t
1985	709.5	100.5	142
86	603.8	93.9	69
87	1,095.1	122.8	112
88	1,256.1	153.8	122
89	1,862.8	383.0	205
90	1,640.8	267.4	163
91	1,029.2	157.1	153
92	857.5	137.2	160

出所: BOLETIN ESTADISTICA N: 404

表 62 1977年国大豆粕推移

年度	重量 1000t	金額 100万円	平均単価 us\$/t
1985	4.6	1.5	328
86	3.9	2.7	197
87	7.8	1.7	223
88	22.0	3.8	172
89	17.9	5.7	318
90	9.0	2.5	276
91	29.0	10.0	347
92	79.8	32.0	401

出所: BOLETIN ESTADISTICA N: 404

表 63 大豆: シルバニア産播種

年度	栽培面積 1,000ha	生産量 1,000t	収収 kg/ha
1983	9.2	11.9	1,298
1984	9.2	10.9	1,187
1985	14.8	21.5	1,449
1986	20.0	25.4	1,270
1987	36.5	62.8	1,720
1988	42.3	72.0	1,700
1989	55.0	38.5	700
1990	28.5	37.0	1,300
1991	15.0	18.0	1,200
1992	9.2	15.5	1,685

出所: BOLETIN ESTADISTICA N° 157

表 64 大豆: シルバニア産播種

年度	栽培面積 1,000ha	生産量 1,000t	収収 kg/ha
1983	43.8	18.8	429
1984	71.3	25.9	363
1985	54.8	50.9	564
1986	77.4	72.2	933
1987	67.1	48.0	715
1988	47.0	32.7	696
1989	66.1	48.9	738
1990	58.7	28.7	489
1991	62.5	61.6	986
1992	77.2	85.1	1,102

出所: BOLETIN ESTADISTICO N° 157

表 65 XIV2-V 大豆生産

国別	生産量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブラジル	18,526	10,938	19,161	-1 24	22
アルゼンチン	8,466	11,530	11,315	27	-1 2
パラグアイ	1,235	1,033	1,315	-1 20	21
ウルグアイ	71	30	33	-1 135	9
XIV2-V計 A	28,297	22,531	31,824	-1 3	13
世界生産量 B	101,621	103,611	112,960	2	8
%	27.8	26.6	28.2	-	-

出所: BID.

表 66

XU2-109 大豆油產

區別	生產量 1,000t			增減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ>VIV	2,646.2	2,505.0	2,779.0	(-) 5.2	5.0
PIVIVIV	893.0	1,261.0	1,394.0	41.2	56.1
IV>VII	25.2	29.0	31.0	16.0	6.9
VIV>VII	33	1.0	1.0	(-) 203.0	-
XU2-10 計 (A)	3,567.7	3,796.0	4,205.0	6.4	10.8
合計 (B)	15,314.8	15,731.0	16,783.0	2.7	6.7
A/B	23.3	24.1	25.1	-	-

出所: B/D ATU/SF

表 67

XU2-109 大豆油消費

區別	消費量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	%	1/c
ブ>VIV	2,015.0	1,855.0	2,149.0	(-) 8.0	15.8
PIVIVIV	(18.4)	161.0	204.0	111.0	26.7
IV>VII	8.6	1.0	1.0	(-) 96.0	-
VIV>VII	2.2	0.0	0.0	-	-
計	2,007.4	2,017.0	2,354.0	0.5	19.7

出所: B/D ATU/SF

表 68

XU2-109 大豆運出

區別	輸出量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ>VIV	2,653	3,800	4,000	30	5
PIVIVIV	1,867	3,200	3,000	42	- 7
IV>VII	1,069	700	1,100	- 53	36
VIV>VII	52	27	30	- 93	10
XU2-10 計 (A)	5,631	7,727	8,130	27	5
合計 (B)	26,943	26,050	29,850	- 3	13
A/B (%)	20.9	29.7	27.2	-	-

表 69

XU2-109 大豆油輸出

區別	輸出量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
PIVIVIV	966.8	1,100.0	1,190.0	12	8
ブ>VIV	711.4	675.0	675.0	- 5	-
IV>VII	17.8	28.0	30.0	36	7
VIV>VII	1.4	1.0	1.0	- 40	0
XU2-10 計 (A)	1,697.4	1,804.0	1,896.0	6	5
合計 (B)	3,882.8	3,592.0	3,852.0	- 8	7
A/B	93.7	59.2	49.2	-	-

表 20.

XIV2-IVの大臣指輸出

国別	輸 出 量 1000t			増 減 (%)	
	a) 85/90平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブツVIV	7962	8,500	8,250	6	- 3
PIVIVIV	4,661	5,900	5,800	21	- 2
103771	103	160	145	36	- 10
7IV771	12	10	9	- 16	- 11
XIV2-IV計 (A)	12,318	14,570	14,204	15	- 3
世界計 (B)	26,183	26,770	26,950	2	1
A/B	980	59.9	54.7	-	-

表 21

XIV2-IVの生産量

国別	生産量 <1000t			増 減 (%)	
	a. 85/90平均	b. 1991	c) 1992	a/b	b/c
PIVIVIV	3,288	3,800	3,600	13	- 6
ブツVIV	31	45	47	31	4
103771	19	22	21	11	5
7IV771	44	32	33	- 26	3
XIV2-IV計 (A)	3382	3898	3702	13	- 5
世界生産量 (B)	20,507	22,560	22,590	9	0
A/B (%)	16.5	17.3	16.4	-	-

出所: BIA.

表 22

XIV2-IVの生産消費量

国別	国内消費量 (1000t)			増 減 (%)	
	a. 85/90平均	b. 1991	c) 1992	a/b	b/c
PIVIVIV	3,227	3,500	3,350	8	- 4
ブツVIV	33	45	47	27	4
103771	19	21	22	8	5
7IV771	44	32	33	- 26	3
計	3323	3598	3452	8	2

出所: BIA

3 工業原料作物

3.1 綿

3.1.1 國際市場動向

棉花價格 (USDA) によれば 1993 年には世界の綿生産量は 18 億トンと推定され、前年と比較して 1.1% の下廻りとなった。これは世界の消費量の前年比 1.5% 増加の 18.7 億トンに達している。世界の在庫は減少している、高い在庫水準が価格に反映している。

2、政府の関与の減少と消費量の増加は在庫の割合を高く、貿易の増加に繋がっている。世界の在庫量は 89/90 年の 5.7 億トンから増加し始め、91/92 年には 8.9 億トンに達し消費量の約 48% に高水準に達している。93 年には約 8 億トンに達している。在庫の増加は 93/94 年の 7.8 億トンに落ち、見直しで 4 億 3000 万トン (消費量の 29.0 億トン) に減少し、割合 (41%) は依然として高水準にある。93 年には約 4 億 5000 万トンの在庫が、中国、インド、及びパキスタンに集中している。中国、インド、及びパキスタンの国内消費量の増加は、輸出の増加に繋がっている。

92 年の平均価格は 1 トン当たり 57.94 センツで 90 年に達している。80.75% は 1.30 近く下廻りである、最近政府の関与の減少によるものである。93 年には引き続き下落傾向にある。インドの国内需要の減少が輸出を中断し、その大きな理由となっている。世界的な供給過剰の状況の中で、米国と EC の在庫の減少が激しい競争の展開に起因し、価格に多少の回復が見られる。

表 33 世界の綿生産供給状況

単位	1990/91	91/92	92/93	1003/94
期首在庫	5.7	6.2	8.9	8.2
生産量	18.9	20.9	18.0	18.6
輸入量	6.7	6.4	5.6	5.8
供給量計	24.7	27.1	26.9	26.8
輸出量	6.5	6.2	5.5	5.9
需要計	18.6	18.4	18.7	19.0
期末在庫	6.2	8.9	8.2	7.8

単位: USDA

3. 1. 2 XILCO 2-10 の生産と市場

1) TULUVIN

TULUVIN は XILCO 2-10 の中下段 1937 年 (12 次) 締りの生産国で、25 万トン以上の栽培面積を有している。栽培地帯は、チリ、アルゼンチン、ペルー、コロンビア、フィリピン、インドネシア 及び 211 国に亘る各地に分布している。1/2 平均の栽培面積は 22.777-10 である。

TULUVIN の栽培地帯は世界の生産と比較して、11.5% の面積を占める。栽培地帯の北西、北東部では乾燥気候が大半を占め、適当な作物である。面積は 100 の栽培地帯から、240 万トンの繊維、45 万トンの種子、繊維生産に必要の繊維生産の消費量は 147 万トン、輸出量は 1143 万トン、中下段の年間 10 万トンの輸入が行われている。

過去 10 年間の統計によれば、世界の生産、繊維の消費量、輸出量は増加傾向にあり、20 年間の生産量は大幅に変化。1987 年の 100 万トン、91 年には 300 万トンに伸び、年間の生産量は 400 万トンに到達した。そのうち国内消費、輸出量は同様に増加している。国内の栽培地帯は、70 年代の全同産の 25% を占める。

表 74 TULUVIN の栽培地帯の統計

年度	栽培面積 (1000ha)	生産量 (1000t)	収水 (kg/m)	種子生産量 (1000t)	繊維生産量 (1000t)
1981/82	403.8	491.0	1229	269.9	152.6
82/83	373.3	373.3	1087	201.6	111.4
83/84	485.5	610.0	1299	325.6	179.6
84/85	462.7	536.1	1199	292.6	171.4
85/86	353.3	376.6	1112	207.0	120.0
86/87	291.8	322.8	1181	174.3	100.0
87/88	499.9	849.4	1726	467.0	281.8
88/89	524.0	619.3	1234	×	×
89/90	533.7	789.0	1493	418.1	254.0
90/91	634.2	781.8	1460	×	×

出所: BOLSA DE CECAPRES 1987-91

表 75 TULUVIN の栽培地帯の統計 (1990/91)

地域	栽培面積 (1000ha)	生産量 (1000t)	収水 (kg/m)
チリ	456.0	568.9	1350
アルゼンチン	77.0	86.4	1200
ペルー	59.0	48.8	1080
コロンビア、フィリピン	32.5	51.0	1570
その他	181.7	26.7	1427
計	634.2	781.8	1460

出所: BOLSA DE CECAPRES

国内消費量は生産量の40-60%程度に落ち、残りの輸出に頼る。国内価格が市場の需給関係に左右される。政府は価格や生産を補助する。

生産性向上のための技術革新の改良、生産費の適正な使用とコスト削減、競争力向上のため。1970年代後半の反復は80/85年と1986年が最高に達し、90年代後半には1,400円/トンにまで回復した。技術革新の中で労働力の不足と反映して技術革新の増加が目立つ。技術管理の中で植物性食品の問題は70年代後半に深刻になり、90年代後半には、キノコ、ビート（甜菜）の発酵と確認がなされ、その現存と防止のため予防的対策が実施された。現在ではこの技術上最大の課題は依然として天候の問題である。

生産物の販売方法の増加と規模の拡大。中小規模の生産者も一般に仲買人に売渡し、野菜施設栽培と特産品販売の生産者も受託栽培に関与するようになった。生産物の規格と品質の向上も進んでいる。

輸出の増加。輸出は、日本、米国、欧州など伝統的市場に加え、最近では台湾、ASEAN諸国への輸出が増えている。

加工部門としての繊維工業は高度成長率9%と高い伸び率を示した。国内工場数は5,800と国内に集中している。工場は大半は原料の調達と加工の消費市場に接近して、2次加工市場に集中している。最近の工業統計によれば、繊維、機械、電気設備の生産高の繊維工業部門は60%と高い。このうち繊維部門は全体の1/3を占める。1980年代後半の高度成長にもかかわらず消費者の購買力低下により、生産高が停滞している。最近の経済政策によるインフレ抑制と国内経済活況の回復の中で、繊維部門は影響を受け、反映が部門に及ぼしている。輸出部門の競争力低下は国内需要の動向が繊維工業の景気の左右を決定している。

1980年代後半の競争力は国内工業の競争力よりも低く、肉挽肉生産の増産により影響を受けた部門である。

① 70年代

70年代は生産力向上の過程で中央南部地方の技術革新による1年性の増産と東北地方の多量生産と多量性の増産が特徴的である。中央南部地方は、1970年代後半の中心地であり、東北地方では中心地が弱体化している。今回技術革新の進捗率は、中央南部が85%と高い。

表 76

720.10 第43 第0 生産統計 (単位)

年度	収量(担) 1000ha	生産量 1000t	収水 kg/ha
1981/82	1,571.1	1,691.6	1,077
82/83	1,348.0	1,525.6	1,132
83/84	1,674.1	1,892.4	1,130
84/85	2,252.9	2,667.9	1,184
85/86	1,995.9	2,198.0	1,101
86/87	1,277.3	1,613.1	1,263
87/88	1,824.6	2,437.8	1,336
88/89	1,506.8	1,813.9	1,203
89/90	1,383.5	1,774.5	1,283
90/91	1,484.1	2,037.8	1,373
91/92	1,591.6	1,848.3	1,161

合計

(不綿)

年度	収量(担) 1000ha	生産量 1000t	収水 kg/ha
1981/82	2,072.7	233.3	112
82/83	1,580.6	78.2	49
83/84	1,430.0	267.7	187
84/85	1,337.3	188.6	141
85/86	1,163.9	116.1	98
86/87	691.1	60.3	87
87/88	734.4	99.3	135
88/89	618.6	47.1	76
89/90	511.8	38.2	75
90/91	345.0	38.5	112
91/92	284.2	26.3	79

合計 1986

表 98

720.10 第43 第0 生産統計 (1992年)

区別	面積 1000ha	生産量 1000t	収水 kg/ha
草綿			
バ T	704.5	972.8	1,381
サ V P 70	230.0	397.6	1,729
ハ A Y	175.7	103.9	591
サ T 70 Y P 70	73.3	85.1	1,161
イ M S	53.8	83.7	1,557
サ T 70 Y P 70	111.3	78.4	704
生 産 量	245.6	141.4	-
計	1,594.2	1,862.9	1,169
不綿			
キ T 70	137.2	13.8	100
ロ 70 A - P	59.3	4.9	74
ロ V T 70 P 70	24.1	1.6	68
ロ 70 Y P	53.5	1.5	29
サ T 70 Y P 70	9.6	1.0	104
生 産 量	-	-	-
計	283.7	22.3	79
合計	1,877.9	1,885.2	1,004

×100 2-10 市場における 73 v.10 金融工業界は 技術設備、技術面、農産物の多様化面での
 下の 2-10 市場の 100 の 全般に 技術設備の近代化に力を入れ、近代化の目下の課題
 となっている。

1) 1977年1.

棉は 1977年の 農産物の中 70 と 75 (仮定の) 代表的作物の 1つである。植
 民地時代の 独立時期から、1977年の 農民は 270 以上の 重要な 複合作物である。こ
 の 政府の 2つに 重要視し、綿作の 農業部門の 優先項目として 各種の 措置を 講じて いる。この 政
 策は 今日の 市場優先 である。

国内市場は 限定的に 輸出の 輸入 農産物として 大豆と 豆油 最大の 項目である。1985年の
 輸出総額の 27% を 占める。現在の 20-30% の 高い 比率を 保っている。

1991年の 統計によれば 綿の 栽培に 従事する 栽培者 数は 190 千人で 農業部門内 全体の 50%
 である。国内の 栽培者は 東部の 60%、西部の 40% である。ほとんどの 栽培者
 は 200 以上の 耕作地、10-100 ไร่、175 ไร่ 程度の 面積を 耕している。同じ 栽培
 者の 7-10% は 92/93 栽培に 参加する 栽培者 であり、過去の 栽培者は 別の 栽培者 である。

表 79 1977年(国内)の 主要作物の 生産状況 (92/93 栽培)

果 別	栽培面積 1000ha	生産量 1000t	収水 kg/ha
カブチアス-	17.9	112.1	2.367
サトウキビ	29.8	62.3	2.088
アムニオン	18.5	39.7	1.981
イブチア	19.6	34.5	1.858
アムニオン	19.5	35.9	1.843
カブチア	18.9	35.5	1.786
コンパチア	22.1	33.6	1.521
カンパチア	17.6	25.7	1.462
その他			
東部地区計	227.6	409.0	1.797
西部地区計	7.9	11.8	1.489
全国計	235.5	420.8	1.787

出所: 農産物. OINTESA ESTADISTICA

過去 8 年間の 栽培面積の 平均 408 千 ha、生産は 481.8 千 t の 規模である。大豆/アムニ
 綿の 代表的 作物の 31% を 占める 国内の 海外収入に 貢献する 重要作物として 今後 生産の 増加を
 期待している。

表 80 パラグアイの糸織の生産推移

年度	収獲面積 1000ha	生産量 1,000t	収率 kg/ha
1981/82			
82/83			
83/84	299	320	1,088
84/85	385	469	1,218
85/86	385	393	891
86/87	284	248	873
87/88	403	543	1,347
88/89	438	630	1,438
89/90	509	642	1,263
90/91	415	632	1,522
91/92	437	391	895

出典: ESTIMACION DE LA PRODUCCION AGROPECUARIA

糸織の大部分は小農業者によって行われ、その小農業者は織造機の供給は主に仲買商人によって行われ、生産物は糸織の仲買商人によって買上られる。

精緻工場の国内は47工場、その中大工場の生産が25%を占める。又国内の織造工場は消費需要の量に生産量の5%を越えており、95%は海外市場に輸出される。

糸織の価格は政府と工場の協定によって毎年決定される。価格設定は若干の国際価格を指針とし、工場コスト、生産コスト等を考慮し、生産者価格に若干の乗数による調整が行われる。

- a) 1表糸の生産規模の小工場の生産コストと取引条件の対立。
- b) 仲買人による融資コストの高く、生産者の利益の低下。
- c) 工場設備の老朽化による高いコストと生産者価格の乖離。
- d) 租税
- e) 市場の肉付情報の不足。

生産物の糸織の大部分は上半期の末から下半期の始めにかけて輸出される。この時期は北半球の織造期に当り、南北半球の季節差がパラグアイの糸織に有利な条件となる。

糸織は基本的に季節差によって行われ、面積が大きい場合、市場価格の変動の場合に脆弱である。また糸織が行われ、一般に糸織は設備投資の不足から中長期投資の遅延、コストの上昇、糸織物の深織工場への移行による生産者利益の低下、織造機の平均123人/台の仲買商人の出現、中世生産者の廃絶、行っている工場は立地不良、その仲買商人の利益の増進は生産者の利益の減少を招き、糸織の市場競争を激化させている。

a) 不備に及ぶ品数の低下。 b) 高い職員工料。 協任分類の欠陥、計量のあやまち等による生産者受取価格の減少

この2つの問題の2つは既述の如く商品の輸送コストの増大が不利な要素である。 因由は加工条件に乏しく、気象条件に乏しく生産に制約を受ける、利用出来ぬ工場が多に残り残った工場も今後生産能力の増大に乏しく残存している。

綿織物と原料としての使用取織物に集積せしむる。 中華首都アムステルダム市周辺に集中する。 織物工業部門の設備能力は計量 19,640 万、織物 355 万 m, 在同人数は 179,000 人で 1977 年と比べて大きく減少した。 業種工業を除き全般に機械の老朽化にあり、他の工業部門と比較して知能は低下している。

設備の老朽化、熟練労働者の不足、原料コストの増大、羊毛部門の直面する問題等より非合法的に輸入した中国産品と競争出来ず状況にあり。 原料の供給は直接に輸入する所が減少している。 交通の便本と価格の割にマニラが低価格にあり、この部門への投資は減少している理由とされている。 多くの活性化させるために政府の長期低利融資と貸付などが提供されることにより、この部門の復興は望むことができるとされている。

1977 年の織物部門の輸出はマニラと比べて綿織物の品数が高価格、原料コストの低価格と価格の定率の差を生じているとされている。

綿織物の輸出は増加傾向にあり、その原因は大きく、同列のアメリカ、日本、西ドイツ、イギリス、フランスと主要輸出先国としており、これらの国に対する輸出は、過去 10 年間の輸出推移は次の通りである。

表 81 1977 年の綿織物輸出推移

年次	数量 1000 t	金額 100 万 P	平均単価 US\$/t
1983	79.0	85.1	1077
84	89.9	131.2	1467
85	158.8	101.8	893
86	119.6	89.7	765
87	91.0	100.9	1109
88	170.3	209.6	1231
89	221.5	309.9	1385
90	231.7	332.9	1437
91	217.0	318.8	1470
92	185.1	209.4	1131

出所: BOLETIN ESTADISTICO N. 407

表 22 1977年 纤维输出统计内 单位 1000 吨

年次	Raw	Spun	71571	1711-	7722	总吨	计
1985	4.0	13.1	5.2	2.4	21.8	112.3	153.8
86	21.9	2.0	5.3	1.0	-	80.4	110.6
87	19.4	3.4	9.0	3.9	-	55.8	91.0
88	2.6	12.4	21.5	4.8	1.8	146.2	170.3
89	11.9	10.5	4.2	5.9	0.6	188.4	221.5
90	18.5	22.6	4.2	8.6	0.5	178.3	231.7
91	5.2	9.1	3.3	16.5	0.2	182.7	217.0
92	7.8	6.9	6.5	3.0	2.3	158.6	185.1

续表 100 万 吨

1985	3.1	11.8	4.6	2.0	20.6	99.7	141.8
86	18.1	1.3	4.2	0.6	-	56.5	80.7
87	26.6	3.4	8.3	3.5	-	59.1	100.9
88	3.1	14.8	2.1	5.7	2.1	181.8	209.6
89	18.1	12.8	4.1	7.3	0.9	263.7	306.9
90	27.7	31.2	3.5	12.2	1.0	257.3	332.9
91	6.9	12.8	4.2	24.3	0.6	270.1	318.9
92	19.3	6.7	6.3	4.1	2.8	179.2	209.4

出所: BOLETIN ESTADISTICO N° 407

⇒ シルク

シルクの生産は、戦後、1950年代後半から1980年代前半にかけて、150%程度増加した。生産は、国内東部の海軍に集中している。生産は、1952年以降、徐々に増加している。

原料は、国内産と輸入とがある。国内産は、主に同国産の同一原料に由来する。輸入は、主に中国産の原料に由来する。国内産は、主に同国産の同一原料に由来する。国内産は、主に同国産の同一原料に由来する。

1970年代後半から1980年代前半にかけて、生産は、徐々に増加している。1990年代前半から1990年代後半にかけて、生産は、徐々に増加している。

表 83

XIV2-109 纤维产量

国 别	产 量			增 减 (%)	
	a) 1985/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ ー ヂ ヴ	159.6	264.1	132.9	(-1) 8	19
ア ー ヴ ヴ	190.3	300.0	240.0	37	(-1) 26
イ ー ヴ ヴ	159.6	264.1	132.9	40	(-1) 99
ウ ー ヴ ヴ	92	*	91	(-1) 65	*
XIV2-109 計 (A)	1,121.8	1,281.2	1,203.9	12	(-1) 6
世界生産量 (B)	1,944.7	*	*	2	*

表 84

XIV2-109 纤维输出量

国 别	輸 出 量			増 減 (%)	
	a) 1985/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
イ ー ヴ ヴ	164.0	219.0	185.1	24	(-1) 17
ブ ー ヴ ヴ	99.3	167.0	109.0	41	(-1) 53
ア ー ヴ ヴ	166.7	141.0	143.0	51	1
ウ ー ヴ ヴ	0	0	0	-	-
XIV2-109 計 (A)	332.0	525.0	437.1	37	(-1) 20
世界輸出量 (B)	5,265.7	*	*	-	-
A/B	63	*	*	-	-

* 不明

表 85

XIV2-109 纤维输入量

国 别	輸 入 量			増 減 (%)	
	a) 1985/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ ー ヂ ヴ	61.8	101.0	105.0	39	9
ア ー ヴ ヴ	15.5	60	10.0	(-1) 158	40
ウ ー ヴ ヴ	7.9	9.2	8.1	14	(-1) 14
イ ー ヴ ヴ	9.7	2.7	2.3	72	(-1) 20
XIV2-109 計 (A)	85.9	118.9	125.3	28	5
世界輸入量 (B)	5,313.3	*	*	*	*
A/B	1.6	*	*	*	*

4. 嗜好作物

4.1 コーヒー

4.1.1 国際市場動向

世界のコーヒー生産量は約100万トン(60kg)で、ブラジルが羊頭(28万トン)、コロンビア(19.5万トン)、インドネシア(7万トン)、メキシコ(4.5万トン)、象牙海岸(4.5万トン)等が主要生産国となっている。大陸別に見ると、世界1,2位の生産国である南米大陸が世界の生産量の40%を占める大連で、ブラジルの19%を占める位である。メキシコ、インドネシア、象牙海岸の中米の主要生産国である。

世界の輸出量は、92/93年度は、28.3万トンで、世界の生産量の約80%を占めている。主要の輸出商品は、南米諸国、インドネシア、象牙海岸の3国である。南米諸国のうちブラジルの輸出量は、過去5年間の平均で、世界の貿易量の22%~28%を占め、1991年20万トン前後の輸出であった。コロンビアの輸出量は、過去5年間の平均で、16.7万トン前後であった。メキシコは、過去5年間の平均で、17.3万トン前後の輸出であった。コロンビアの輸出量は、16.7万トン前後であった。メキシコは、過去5年間の平均で、17.3万トン前後の輸出であった。象牙海岸は、過去5年間の平均で、4.5万トン前後の輸出であった。

西米諸国の輸出量は、高級コーヒーの生産国であるブラジルの輸出に比べて、全体の12%程度の輸出に留まっている。コロンビアは、過去5年間の平均で、16.7万トン前後の輸出に留まっている。メキシコは、過去5年間の平均で、17.3万トン前後の輸出に留まっている。象牙海岸は、過去5年間の平均で、4.5万トン前後の輸出に留まっている。

コロンビアの場合、インドネシアの輸出に比べて、ブラジルの輸出に比べて、全体の12%程度の輸出に留まっている。コロンビアは、過去5年間の平均で、16.7万トン前後の輸出に留まっている。メキシコは、過去5年間の平均で、17.3万トン前後の輸出に留まっている。象牙海岸は、過去5年間の平均で、4.5万トン前後の輸出に留まっている。

世界のコーヒー市場は、生産国と消費国の間の国産コーヒー市場である。生産国の輸出削減は、インドネシア、コロンビア、メキシコ、象牙海岸の4国に集中している。最大の輸出国であるブラジル、最大の消費国であるインドネシアの利益に一致して、1998年7月に、両国が交渉を中止した。以後、世界のコーヒー市場は、価格低下の時期に入ると見られる。

表 88

ブラジルコーヒー生産推移

年度	面積 1000ha	生産量 1000t	平均収量 kg/ha
1985	2,533.8	3,821.3	1,508
86	2,591.5	2,082.8	803
87	2,876.6	4,405.4	1,531
88	2,975.2	2,737.7	920
89	3,026.5	3,059.7	1,011
90	2,905.8	2,926.2	1,007
91	2,767.4	3,050.6	1,102
92	2,498.5	2,587.1	1,035
93	2,300.4	2,573.8	1,119

出所: 1996

表 89

ブラジルコーヒー輸出実績(コーヒー豆)

年度	数量 1000t	金額 100万ドル	平均単価 us\$/t
1987	988	1,959	1,983
88	514	1,170	2,276
89	653	1,610	2,465
90	853	1,106	1,357
91	1,095	1,382	1,262
92	1,018	970	953
93	964	1,065	1,105

(1987年以降)

1987	26	210	5,833
88	23	124	5,367
89	30	193	6,433
90	51	147	2,878
91	32	97	3,031
92	51	142	2,772
93	64	217	3,377

出所: CACEX, SECEX

表 90

ブラジルコーヒー輸出先別 (1993年)

輸出先国	数量 1000t	金額 100万ドル	平均単価 us\$/t
米 国	206.2	199.3	966
イ タ リ ヤ	114.7	139.0	1,211
ド イ ツ	98.6	117.5	1,190
フ ラ ン ス	80.4	98.2	1,221
ア ー ジェ ン	43.0	46.6	1,085
オ ー ス ト リ ア	37.4	41.6	1,112
ポ ー ル ー ド	35.4	41.1	1,162
チ レ	32.1	37.3	1,164
其 他	316.1	344.3	-
計	963.9	1,064.9	1,105

出所: SECEX

5 果実類

5.1 リンゴ及び梨

5.1.1 国際市場動向

世界の供給状況：リンゴ及び梨の世界生産は90年以降減少傾向にあり、93年のECにおよび大増産傾向にあり、東ヨーロッパの減産と相殺されつつある。世界のリンゴ生産の約16%は南半球において生産されるが輸出品は33%を占め、梨の場合も世界の生産の15%、世界の輸出品の5%は南半球産である。世界の消費量の95%は北半球に集中する。世界の年間貿易量は約2,500千トンである。

世界の生産国としては中国、ドイツ、イタリ、フランス、トルコ、日本、スペイン及びハンガリーが大きい。南半球では、アルゼンチンが最大の生産国で、チリ、南アフリカ連邦、ニュージーランドが主要生産国である。このうちチリは最近急速に生産を増大しており、アルゼンチンに次ぐ生産国に成長している。これらに次いで新しい生産国としてブラジル及びオーストラリアがある。

世界の輸出国としてはフランスがもっとも大きく、中国及びチリがこれに次いでいる。チリの輸出品は生産量の50%に達しているがアルゼンチンに次いでいる。これらに続きオーストラリアの輸出も大きく、ロンドン港はEC市場への中継港の役割を果たしている。最近の政治情勢の悪化により輸出も落ちているが、ハンガリーも主要な輸出国に数えられる。

世界の輸入国はドイツの輸入が大きく、世界の輸入の1/3を占めるに集中する。中国は最大の輸出国であると同時に最大の輸入国でもあり、南アフリカのEC市場に供給する。EC圏は世界の需要の81%を占める最大の市場である。

北半球の補完期とおよそ供給は南半球から行われる。中でも最大の市場であるECの補完期に需要を供給している役割を果たしている。EC市場への南半球産の輸出国はチリに次いで輸出品を増大している。従って地位を占めつつある南アフリカ連邦、ニュージーランド、アルゼンチンもこれに加入している。

北半球の補完期に供給する南半球の生産量は冬期に集中する。各供給国の政治情勢の悪化により果物の南アフリカやニュージーランドでの公共市場への参入も、半産国体への参入の増加も南アフリカの場合の民間のみで行われている。一時期、南半球の参入は統合のコントロールが難しくなるが、現在では参入の増加は今後の生産過剰の事態を招く場合の再びの参入を後退させるかと思われている。

表 91

リンゴ：南半球の供給状況 (1991/92)

1,000t

区分	アフリカ	オーストラリア	チリ	ニュージーランド	南アフリカ連邦	計
a. 生産量	1,100	312	780	459	581	3,232
b. 取引量	1,100	312	770	429	581	3,192
c. 輸入量	0	0	0	2	0	2
d. 供給量	1,100	312	780	461	581	3,234
e. 輸出量	270	32	396	239	256	1,192
f. 国内消費量	200	162	200	45	190	797
g. 工業加工	630	118	290	177	135	1,350
h. % (a)	25	10	51	52	49	37

出所: USDA

表 92

梨：南半球の供給状況 (1991/92)

1,000t

区分	アフリカ	オーストラリア	チリ	ニュージーランド	南アフリカ連邦	計
a. 生産量	300	127	166	16	217	826
b. 取引量	300	127	164	13	217	821
c. 輸入量	0	0	0	1	0	1
d. 供給量	300	127	166	17	217	827
e. 輸出量	170	32	116	3	105	425
f. 国内消費量	70	25	43	10	34	185
g. 工業加工	60	70	7	4	25	216
h. % (a)	57	25	20	18	48	51

出所: USDA

梨の場合もリンゴの場合と同様に北半球の生産が85%、消費が95%を占める。世界の輸出入量は年間で約80万トンであり、梨の場合もECが最大の市場となっている。南半球の輸入は皆無な状況にある。

南半球における梨の輸出は供給量の51%に達しており、リンゴの場合よりも比率が高い。世界最大の産国はやはり、オーストラリア、チリ、日本、トルコ、フランス等の諸国であり、南半球ではアフリカと南アフリカ連邦、チリ、オーストラリア、ニュージーランドが抜けている。

梨の輸出国の中でアフリカと南アフリカ連邦の輸出量はともに大きく、南半球では南アフリカ連邦とチリ、北半球では韓国が主要輸出国となっている。また、EC圏内ではイタリア、フランス及びドイツの輸出量が大きく、中でもドイツは競争力も輸出量も大きい。EC市場における中絶基地の立場を示している。

世界の輸出国の中でドイツの輸入が大きい。全体の12.25%を占めている。EC圏内のフランス、イタリア、北半球の韓国等の諸国、中でもフランスの輸入もかなりの割合がある。世界の輸入統計に反映されている南半球ではフランスが唯一の輸入国であり、アフリカと

とつては 世界の市場と見られる。

梨の場合も、りんごの場合と同様に、南半球から北半球の栽培期へ供給する立場になる。北半球の栽培期には、供給国としての EC 諸国からの主産地持率と、 π 関の輸出分野に付く高度の成長が注目される。

梨の国際取引における特性としては、競争が水産品に激しい市場である。その中心となる大企業が仲介していることで、カルテル化はなっていない。又、価格面でも、取引条件もろくに公開され、透明度の高い市場である。一部の国や経済ブロックが特定の期間に限定して行っている規制を除いて、特別の制約はない。

南半球から北半球に向ける行われたい供給形態は、国々によって異なっており、一概には言えない。一部の国では、南アフリカ連邦や オーストラリア などは政府が介入する取引委員会を通じて国際取引を行っており、これを E.C. 関と見られる。又、EC 関内では民間主体である。

世界の消費市場における梨の嗜好の変化は、みとめられる。今後10年間のりんごは梨の消費が落ちると見られるというのが業界筋の一致した意見である。逆に品質の向上を要求する規制も高まっている。梨の需要は増大し、これにたいして生産も拡大して見られる。

表 93 りんご：世界の生産と輸出 1,000t

年度	生産	輸出	比率 (%)
1988	22,972.3	3,107.1	13.5
89	22,804.5	3,251.0	14.2
90	20,210.8	3,395.3	16.8
91	19,227.7	3,559.7	18.5
92	24,610.9	3,794.7	15.4
85-90 平均	21,995.9	3,251.1	14.8

出所: FAO

表 94 梨：世界の生産と輸出 1,000t

年度	生産	輸出	比率 (%)
1988	5,432.9	724.4	13.3
89	5,379.9	833.7	15.5
90	5,362.6	826.4	15.4
91	4,804.7	932.2	19.4
92	5,764.7	986.7	17.1
85-90 平均	5,325.7	897.9	16.8

出所: FAO

5.1.2 XILON-IVCの生産と市場

1. TIVCの分析

国内のVVCは及第の義務面積は約74千177ヘクタール。初期のTIVC生産は生産の中心地帯としていた。その義務面積は約150ヘクタールに拡大された。

a. 古い生産地帯：国内義務面積の12% 60%に相当するTIVC - 義務の平均面積は10ヘクタール。全般に投資VVCは低く、TIVC生産の最盛期はTIVC生産(20年XIX)の60%近く。LVCの品質は低く、品種の多様性が少ない。灌漑は運河からの勾配を利用する方法を用いた。最近では大型灌漑の包摂全体に投資が行われている。

b. 新しい生産地帯：義務の規模は50ヘクタール以上で義務投資は大型の投資が行われ、全般に灌漑が低く灌漑が大きい。果実の品種は量販義務の品質が高。

灌漑は英浦システムを用いた。全体の約40%は灌漑に合致する。

及第義務の水準と比較して灌漑の水準は低く、又上の灌漑は前者の1/2程度

約30%に灌漑は60%に2倍の生産量である。

果物の場合は大半が新しい灌漑を用いた。LVCの生産量は約1/2に減少した。

表 95 VVCの義務面積

年次	面積 (ha)				比率 (%)		
	義務(1)	生産(2)	Ente (3)	銅計 (4)	(1)/(4)	(2)/(4)	(3)/(4)
1981	30.9	5.4	15.7	52.0	59	10	31
82	32.5	7.3	15.3	55.1	59	13	28
83	32.8	7.5	16.0	56.3	58	13	29
84	33.8	7.8	15.9	57.5	59	14	27
85	34.1	8.3	15.8	58.2	59	14	27
86	34.6	8.1	15.8	58.5	59	14	27
87	35.0	8.1	15.1	58.2	60	14	26
88	36.3	8.3	12.2	56.8	64	15	21
89	35.9	8.3	12.3	56.5	64	15	21
90	3/4	3/4	3/4	3/4	-	-	-
91	3/4	3/4	3/4	3/4	-	-	-

出所: FUNDACION MEDITERRANEA, SEAG.

注: 3/4 7-7-81

年度	面積 (1,000 ha)				比率 (%)		
	植付面積 (1)	収穫面積 (2)	収穫可能面積 (3)	合計 (4)	1/4	1/2	3/4
1981	9.0	1.6	6.5	17.1	52	9	39
82	9.6	1.2	6.6	17.4	55	7	38
83	9.7	1.2	7.6	18.5	52	6	42
84	10.8	1.3	7.6	19.7	55	7	38
85	11.0	1.4	8.3	18.7	58	7	35
86	11.1	1.4	8.3	18.8	59	7	34
87	11.5	1.4	8.2	19.1	60	7	33
88	12.1	1.7	8.1	17.9	68	9	23
89	13.0	2.0	8.0	18.0	70	10	20
90	14.0	2.0	8.0	18.0	70	10	20
91	15.0	2.0	8.0	18.0	70	10	20

出所: FUNDACION MEDITERRANEA. - SEAG

1人=2.5haの100%の工場は合計250haあり、そのうち25%の生産の60%を処理し、40%は残りの小型工場に分散して行われる。この小型工場は果物の規模が小さく、生産量も少ない。

産物の100%は国内市場に供給され、輸出用のものは冷凍工場に貯蔵され、冷凍車によって港に運ばれる。鉄道輸送の方法が主流で、港に近い冷凍工場が主流で、トラックによる道路輸送も存在する。

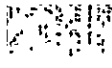
海外市場向け輸出品は1人=47%、梨の60%は加工品として、果物と船積みされる。同様に果物の輸送も向港にあるものの、季節別と船積みの量が異なる。

市場動向

上述の通り、アルゼンチンでは1人=の栽培面積は80年代の中期まで増加を続けたが、1985年以降は成長が停滞し、その後停滞の状況が続いている。

栽培面積の傾向と同様に生産量は1985年以降横這いの状況であり、年間100万トン前後の生産が続いている。89/90年度は果物の国内消費が減少し、92年以降は輸出も低下している。残りの生産量は2-3工場に集中して行われ、現時点で産物の50%は2-3原料として処理されている。

栽培面積の半分は0.15haの栽培形態で、栽培単位は小さく、従って投資も低く、旧来の栽培方法が残り、15ha以上の面積は30%程度に増加している。



下地としての栽培と収穫の品質も低い。

このため栽培形態は従来と異なり、新しい栽培形態による従来と異なり大規模な生産と
 共に、全体的な同産競争が強い理由もあって、TIVUの1/2は栽培と収穫と
 他の問題も、品種の支持性も乏しいこと、これはRED DELICIOUS 種や GRANNY SMITH 種が
 大半を占めている。これらの品種は主要輸入国にも必要が減少している品種である。

このほか、収穫と貯蔵に必要十分な設備不足、輸送、貯蔵等々の問題も抱えている

これらの海外市場はフランスと最大の輸出市場として、オランダ、ドイツ、スイス等ヨーロッパ諸国
 への輸出量も大きい。国内市場も停滞している現在、海外市場への依存度が高まっている。この
 分野でも次のような問題も抱えている。

- 最近のヨーロッパ市場への供給も減少している。価格も従来と異なり見合われる状態にあること
 ヨーロッパ市場の品種も従来の新しい品種への転換も進んでいない。
- 長年にわたる最大の輸出市場であるフランスのフランスと同様に、同様に最近の傾向も
 減少を反映して輸入の減少が顕著であること。特に92年の輸入量は過去平均の50%
 下地に陥っている。
- フランス市場に關して、従来からの事情も好転する市場統合計画（EUの2-10）の推進も
 影響を及ぼし、24時間生産体制も同様に生産と流通の面で生産と流通の面で生産と流通の面で
 商品の品質管理も、輸送と流通も有利な影響も及ぼしている。

表 97 リンゴ：TIVUの栽培と収穫

年度	重量 (1,000t)				比率 (%)		
	生産量 (1)	輸出量 (2)	日消費 (3)	工場 (4)	(2)/(1)	(3)/(1)	(4)/(1)
1981	908.0	208.9	381.9	317.7	23	42	35
82	824.0	225.7	266.5	311.8	27	32	41
83	817.0	208.7	164.0	449.3	26	20	54
84	933.2	172.9	198.1	562.2	19	21	60
85	922.4	196.5	251.6	474.3	21	27	52
86	593.9	139.0	183.2	276.7	23	31	46
87	1,074.4	207.8	398.6	468.0	19	37	44
88	924.5	211.1	271.3	442.1	23	29	48
89	964.2	237.4	269.6	466.2	25	27	48
90	1,050.0	241.4	262.9	545.7	23	25	52
91	950.0	203.2	259.0	487.8	21	27	52

表 98 引込: TIVEY への輸出推計

年表	数量 1000大	金額 1,000 \$/大	平均単価 USA/大
1981	227.7	116.9	513
82	232.7	111.0	477
83	213.8	12.9	339
84	178.3	55.2	310
85	200.1	57.5	287
86	133.9	65.5	489
87	201.5	66.8	332
88	207.7	56.5	272
89	227.2	54.7	241
90	260.6	74.8	287
91	215.7	93.7	434

出所: CORPOFRUT POL. COM. EXP. ARGENTINO

表 99 引込: TIVEY への輸出先別

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
EC					
オランダ	42.2	50.6	46.3	60.5	46.1
ドイツ	17.6	25.6	29.8	23.4	32.5
スペイン	-	-	-	8.8	12.8
スイス	-	-	-	-	13.4
イギリス	1.4	2.3	4.8	2.2	2.5
ポルトガル	-	0.6	0.6	8.6	7.7
フランス	0.3	6.6	0.6	0.2	0.2
その他	-	0.1	-	-	0.2
小計	61.5	85.8	82.3	103.6	115.4
ラテンアメリカ					
ブラジル	99.1	79.4	97.9	92.0	55.0
ボリビア	1.2	-	1.3	-	-
コロンビア	0.2	1.0	0.3	-	-
その他	0.2	-	0.9	-	0.1
小計	100.7	80.4	100.4	92.0	55.1
スカンジナビア半島					
スウェーデン	19.8	18.7	24.8	26.1	27.2
ノルウェー	13.1	16.1	12.7	13.2	-
その他	1.4	1.2	0.6	0.6	-
小計	34.3	36.0	38.1	39.9	27.2
北アメリカ					
米国	11.1	8.2	16.7	6.0	9.5
その他	0.1	-	-	-	0.3
小計	11.2	8.2	16.7	6.0	9.8
その他	0.1	0.1	-	-	0.7
合計	207.8	211.0	237.4	241.9	207.2

出所: FUNDACION MEDITERRANEA

りんごの場合と異なり、アムステルダム条約の締結後、輸出は向う増える割合で年々増加している。過去10年間の推移をみると前年比輸出量は概して15%以上、大半は増加傾向である。この傾向は輸出量の割合も81年の27%から91年には59%に達している。通関料消費量は58名から25名へと減少し、工業原料消費量は15-16名で変わっている。

表 100 梨: アムステルダム条約締結後

年度	生産 1,000t				消費 %		
	生産 (1)	輸出量 (2)	国内消費 (3)	工業原料 (4)	(2)/(1)	(3)/(1)	(4)/(1)
1981	130.0	34.9	75.9	19.2	27	58	15
82	137.5	57.9	19.2	60.4	42	14	98
83	202.0	68.9	40	40	34	20	20
84	167.0	52.0	40	30	31	24	18
85	192.5	76.7	75.7	39.9	40	40	20
86	164.9	58.0	68.2	38.7	35	41	24
87	252.1	95.2	95.1	61.8	38	38	24
88	201.0	115.2	57.9	27.9	57	29	14
89	217.3	134.2	40.1	43.0	62	18	20
90	275.0	151.0	69.9	54.1	55	25	20
91	270.0	158.9	67.5	43.6	59	25	16

出所: FUNDACION MEDITERRANEA - CORPOFRUT

我が国は1980年以降はほとんど同様の規模で輸出を続けてきた。しかし、アムステルダム条約締結後、輸出は向う増える割合で年々増加している。過去10年間の推移をみると前年比輸出量は概して15%以上、大半は増加傾向である。この傾向は輸出量の割合も81年の27%から91年には59%に達している。通関料消費量は58名から25名へと減少し、工業原料消費量は15-16名で変わっている。

この傾向は輸出量の割合も81年の27%から91年には59%に達している。通関料消費量は58名から25名へと減少し、工業原料消費量は15-16名で変わっている。

表 101

梨: 南米への輸出推移

年次	重量 1,000t	金額 1,000Fu	平均単価 152/b
1981	36.3	25.5	702
82	62.8	34.7	554
83	68.9	27.0	391
84	52.0	18.5	355
85	76.7	27.2	355
86	51.3	23.1	450
87	97.2	43.6	449
88	116.2	50.8	437
89	142.2	49.0	344
90	158.0	62.7	397
91	155.2	83.9	540

出所: FUNDAÇÃO MEDITERRANEA.

表 102

梨: 南米への輸出先別

1,000t

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
E C					
イタリ-	21.1	29.2	35.8	38.5	41.8
フランス	13.4	16.9	13.5	21.3	21.9
ドイツ	6.5	8.9	14.7	17.9	13.1
ブラジル	1.5	3.2	1.7	2.7	4.8
その他	0.1	-	-	9.3	1.3
小計	42.6	57.7	65.1	80.7	91.9
アメリカ					
ブラジル	39.2	45.3	49.0	51.4	46.7
その他	-	-	-	-	0.2
小計	39.2	45.3	49.3	51.4	46.9
北アメリカ					
米 国	7.4	7.4	13.7	11.8	13.9
その他	0.4	0.5	-	0.2	-
小計	7.8	7.9	13.7	12.0	13.9
その他の国					
スウェーデン	5.1	4.3	5.2	5.2	4.7
その他	0.5	1.0	0.9	1.7	0.9
小計	5.6	5.3	6.1	6.9	5.6
その他	0.2	-	-	-	0.6
合計	95.4	115.2	134.2	151.0	158.9

出所: FUNDAÇÃO MEDITERRANEA.

4) ブラジル

ブラジルは伝統的カニ生産国で、輸入代替型に用いる革新的な融
資面、技術援助面等、板井氏が80年代前半に急速に拡大して、現在そのカニ
70%以上は、南米3位の生産国として自給率を高めている。

同国の生産地域は南部5州に集中し、中でも「カニの王国」と呼ばれる州に生産中心地がある。この全国生産
50%以上が集中する。南部州は、カニの生産に、20%の生産力と40%の生産力とを有している。これは
10%の生産力と南東部の州に比べて、カニの生産力に倍差がある。

養蚕面積は、80年代前半から90年代前半にかけて25千ヘクタール前後に停滞している。
反収は増加傾向にある。1ヘクタールあたり88kg、98kg、93kg、137kg、140kgの増加を示し
これは反収の生産の増加を示している。生産の向上は統制中心地での「カニの王国」に
おける海外技術者の製品改良、養蚕の合理化による「3倍大産」。同国のカニの
生産の1,300の養蚕の生産は、養蚕の競争力と、在国労働力の増加とを100人労働力と一
産量部門の構成に示す。州の主要経済部門は、

表 103 ブラジルのカニの生産推移

年度	養蚕面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	生産量 1,000kg	反収 kg/ha
1984	19.0	19.0	1,278.9	67,310
85	20.1	20.1	1,443.2	71,800
86	21.0	21.0	1,779.0	84,714
87	21.0	21.0	1,668.2	79,438
88	22.4	22.4	2,196.6	98,268
89	21.1	20.9	2,386.9	114,365
90	22.3	22.3	2,717.6	121,663
91	25.8	25.6	2,634.5	102,791
92	24.2	24.1	2,997.0	124,284
93	25.5	25.4	3,448.0	137,226

出所: IBGE 87年30養蚕面積の統計は推定値である。

表 104 ブラジルのカニの養蚕比較

州別	収穫面積 1,000ha	生産量 100kg	反収 kg/ha
州-7.074-7	12.3	1,896.2	153,615
州-7.074-7	10.6	1,325.2	124,907
州-7	1.7	184.1	108,294
州-12.70	0.7	83.5	114,252
全国計	25.9	3,488.0	137,226

出所: IBGE

生産中心地帯の中心地帯での栽培面積が拡大したと見られ、最近の急激な現物価格の暴落も、このためと見られる。1988年5-6年の若木の生産段階に入ると、この若木は打倒栽培技術に代わると、栽培面積も従来と比べて1.5倍近く、高反収の予想が示されている。今後の栽培面積の増大が期待される。

同様に GALA 種と FUJI 種も主産地であるが、この品種は輸入国に好まれる品種であり、天候不順による生産量の減少が懸念される。この中、GALA 種の場合、他の品種より1月早く2月に収穫に入るため、EC市場でもこの品種不足の時期は供給不足の恐れがある。

このほかにも、フランス産の PINEAPPLE、APPLE、PEAR 等は、他産地よりも輸入の代替に努められている。91年には、この輸入量は従来50%を越え、生産量の10%を越える輸入が見込まれている。国内消費量は、依然として低く、1人平均2.3kg程度に留まっている。

表 105 フラワーリンゴの輸入推移

年度	数量 (トン)	金額 (US\$1,000)	平均単価 (US\$/t)
1988	608.4	229.7	377
1989	3,038.5	1,129.0	371
1990	4,293.0	2,522.2	401
1991	3,306.5	1,684.1	509
1992	32,549.8	20,624.3	634

表 106 フラワーリンゴの輸入市場 (1992年)

輸送先国	数量 (トン)	金額 (US\$1,000)	平均単価 (US\$/t)
アメリカ	17,948.7	11,357.2	655
オーストラリア	10,601.5	6,106.8	576
英国	2,477.1	2,115.3	608
ドイツ	445.5	377.8	848
韓国	314.9	334.7	1,063
その他	362.1	332.5	918
計	32,549.8	20,624.3	634

出典: DECER.

フラワーリンゴの輸入規模は、99年には最高6千トン程度に増加した。輸入量は250万トンに増加した。92年には、フラワーリンゴと同様に、(GALA 及び FUJI) の供給国であり、フラワーリンゴの輸入国である。このため、天候不順(降雨、降雪)により、生産量が減少したため、フラワーリンゴの輸入需要が増加した。1992年には、20万トン以上の外貨を付している。

1) シンチイ

栽培面積の拡大と蒸化率、2,500 ~ 3,000 1/2-10/10 間を上下に。年内生産量は 35T > 程度減少、平均単収は 15 大/ha である。1986年の栽培面積は 1/2 以上が 200 本であった。

1. 栽培面積の平均面積は増加傾向にあるが、これは大型栽培の出現を示すものとして、同時に近代技術の導入も意味している。

輸出量及び工業用量は減少傾向、国内産の大部分は国内消費に向かっている。国内消費水準は高し、1992年において 1人年間 5,10kg の消費量であった。現在においては、包裁や冷凍貯蔵の施設を擁するに、国際市場との競争力は低い。モンゴリアは木深の深、自然流下、他国と比較して、澆灌費用が低く、これにより国際競争力を持つ条件は揃っている。今後の生産動向は、アジア、オセアニア、ブラジル及び北半球に広がる供給圏を、主として確保する可能性がある。

梨については、栽培面積が 1,000 1/2-10/10 間を上下に拡大している。反収は 10kg 程度と同レベルの 14 大/ha が記録されている。生産物の大半は国内消費に向かっている。消費量は、1人年間 325kg のレベルに上昇している。生産物の 10% は、隣国のブラジルに輸出されている。

2) パラグアイ

リンゴ及び梨の国内生産量は減少傾向、消費量は減少傾向、これにより 2-10/10 中の 7/10 はパラグアイ及びブラジル産品の対内市場と見られる。92年には、パラグアイに栽培が導入された。

これは、これまでに、パラグアイに栽培されたリンゴ及び梨の大部分は、輸出を期待している。

- パラグアイは、伝統的に生産国で、パラグアイ中最大の生産規模を有している。最近ブラジルの生産拡大により、かつての大半は、国内市場を失っている。
- ブラジルの政府が、輸入代替政策の恩恵を、80年代以降、急速に生産拡大して、自給率に近づいている。近い将来、北半球に取って代る強力を供給する可能性がある。

パラグアイは、国内産の大部分を国内消費している。92年には、パラグアイが、減少傾向にある生産物の輸入に、パラグアイ及び北半球に広がる供給圏を、主として確保する可能性がある。

XEROX-10と距離的に近く、反340の面で深い肉連を持つ、F11-9の1/2と及ぶ率の塊、及び平均は20%増えたとある。

- F11-9の果実生産は、この10年間で急速な発展を遂げ、その栽培面積は1/2に伸び、平均的な場合、200%の増加を遂げた。この期間中にその生産量は142%の増加を記録した。これは、そのF11-9のF11-9の27%の増加率を大中に示している。
- 輸出も伸びており、その伸び率は生産の場合と同様にF11-9の伸び率とほぼ同じ。栽培面積の50%が輸出に向かっている。国内工業の原料としての消費量は少ない。
- 栽培コストはF11-9の伸び率も低く増加している。これは主に労務に起因するF11-9の伸び率が大中に低く、全体のF11-9の栽培コストはF11-9の伸び率とほぼ同じ。これは、F11-9の伸び率とほぼ同じ。包装コストは輸送コストもF11-9の伸び率とほぼ同じ。これはECの輸出税率の場合、F11-9の伸び率とほぼ同じに相殺される。

XEROX-10はF11-9と比べて、北米市場では同等の地位を確立しており、F11-9の中心とするとXEROX-10はF11-9と比べて、競争力に適合するものと見られる。

世界の主要市場の需要動向は次の通りである。

- 先進国 : 高い需要増加の予見がある。品質は年々高くなる傾向にある。化学製品の残留物の少ない鮮果実、及び有機物による劣化防止剤は果実の寿命は年々高くなる傾向にある。特に、紅玉の広範囲な広報活動により、1/2の消費の増加中と見られる。また、F11-9の品質はF11-9の消費者の嗜好の変化も予見される。
- 東南アジア : 所得の向上による滋養食品の多様化の予見がある。高い需要がある。
- 旧社会主義国 : 90年代の政治変化の中で、経済問題からF11-9の消費はF11-9の消費増加の予見がある。
- アフリカ諸国 : XEROX-10とF11-9の消費の増加の予見がある。
- 日本 : 高品質のF11-9の求めからF11-9の消費の増加の傾向の予見がある。

表 107 X1622-104 計43 リンゴ 生産状況

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	950,000	939,000	921,567	3
フランス	333,800	348,600	270,869	19
ドイツ	564	566	588	(-) 4
イタリア	34,600	28,798	30,681	11
X1622-104計 A	1,318,964	1,307,958	1,223,705	7
生産総量 B	19,227,700	24,610,900	21,995,867	(-) 14
A/B (%)	6.85	5.31	5.56	-

表 108 X1622-104 計43 梨の生産状況

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	270,000	260,000	217,133	20
フランス	-	-	-	-
ドイツ	160	161	158	1
イタリア	12,000	12,604	14,390	(-) 20
X1622-104計 A	282,160	272,765	231,682	18
生産総量 B	9,806,700	5,764,700	5,325,133	(-) 11
A/B (%)	5.87	4.73	4.35	-

表 109 X1622-104 計43 リンゴ 消費量

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	746,769	735,111	716,874	9
フランス	353,752	*	404,214	(-) 14
ドイツ	*	*	*	*
イタリア	34,022	29,374	39,529	10

* 資料なし

表 110 X1622-104 計43 梨の消費量

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	111,139	91,774	112,070	- 1
フランス	46,730	*	39,540	15
ドイツ	*	*	*	*
イタリア	19,963	11,910	13,592	- 24

* 資料なし

表 111 X1622-104 計43 梨の輸出量

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	158,861	168,226	105,064	34
フランス	0	0	0	*
ドイツ	*	*	*	*
イタリア	1037	707	1,597	- 64
X1622-104計 A	159,898	168,933	105,862	34
生産総量 B	932,200	986,700	794,833	57
A/B (%)	17.1	17.1	13.3	-

* 7-1-1 凡

5.2 かんきょ類

5.2.1 国際市場動向

1) 概要

商業ベースで行われる世界のかんきょ栽培は面積、栽培技術、品種、市場にそれぞれ差異はあつたが、全般的に増加傾向にある。産量の増加は栽培面積の増加による場合が大半である。

かんきょ栽培の収穫期と成熟期の肉体的な比較から、1地域は収穫期と成熟期はそれぞれ別の市場に供給される。北半球は世界のかんきょ、産量の70~80%が集中する地域である。春から夏にかけては成熟期は南半球の産量供給者の主場である。なかまは、北半球は2~10%である。

世界のかんきょ栽培は熱帯、亜熱帯の地域で水不足は地域で行われる。この条件下にあり、地帯は一部の例外を除いて南北の緯度20~40°の範囲に集中する。この地帯に集中する主要産国は次の通りである。

北半球： 北米： 米国、メキシコ

ヨーロッパ： スイス、ギリシャ、イタリー

アフリカ： アルゼンチン、エチオピア、モロッコ、ツタン

アジア： 中国、インドネシア、インド、イラン、イスラエル、日本、レバノン、パキスタン、イラン、シリア、トルコ

中米： キューバ、ホンジュラス

南半球： 南米： アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイ、チリ

アフリカ： 南アフリカ連邦

大洋洲： オーストラリア、ニュージランド

1992/93 年度における世界のかんきょ生産量は72億トンと推定され、これは24年ぶりに推定値である。90~93年の平均は84~86年の平均値と比較すると26.1%の増加であった。この期間中、メキシコ、キューバ、アルゼンチン、スイス、トルコに大きな増加があった。反面伝統的な産地である、イスラエル、イランは生産の減少が記録されている。

粗産額 (USDA) が主要産国を対象として行った調査結果によると、90年、最終的な産量は49.2億トンで、91/92年には52.1億トンに伸びた。世界的な増産傾向は維持され続けている。

1992/93 年度の最終的なデータによると、北半球は13%の増産があった。産量は32億トンと推定され、6.5億トンが輸出、11.1億トンが工業用原料、残りは採掘と消費された。

南半球では15.8百万トンの産量の中、7.8百万トンが工業原料として処理され、560千トンが果物としての輸出であった。

表 112 かんきつ：世界の産量 (1000トン)

国別	84/86平均 (A)	1990	90/93平均 (B)	(A/B)増減
ブラジル	11,502	12,257	14,399	25.2
米 国	8,099	8,241	10,923	34.9
スペイン	3,333	4,159	4,660	39.8
メキシコ	2,011	3,169	3,410	69.6
イタリヤ	2,366	2,705	3,151	4) 6.4
トルコ	1,399	1,728	1,605	14.7
イスラエル	1,440	1,280	1,095	4) 23.9
エジプト	636	1,020	1,006	58.2
南アフリカ連邦	725	1,101	931	28.3
シリア	146	195	235	61.0
その他	22,292	21,445	29,283	31.4
合計	54,949	62,300	69,317	26.1

出典: FAO, USDA. 注) 93年11月推定値合計値。

かんきつの種類としてオレンジ、レモン、ライム、グレープフルーツ等の中でオレンジの産量の圧倒的に大きくなり、90~93年の平均ではかんきつ産量の72%を占めている。又84/86年間の平均産量と90/93年の平均とを比較すると30.2%の増加であった。ミロ2-10の産量は90~93年平均で世界産量の28%を占めており、上期と同様に23.6%の増加が記録された。一部の産国(南アフリカ、シリア、エジプト)における政府の生産振興策、液滴オレンジの国際価格上昇と利益増進による生産の増加(ブラジル同様)にもよって産量の増加がみられた。

世界のオレンジ生産国の中でブラジルの産量最大規模を占めており、世界産量の26%を占め、ブラジルの国内かんきつ産量の90%はオレンジである。国内産量の80%はオレンジに集中し、ブラジルのオレンジ産物の大半は工業原料としての加工用に向かい、産出されたもののほとんどが同様に輸出された。また、オレンジの価格を押し下げている。

特にブラジルの大型産国である。ブラジルの場合と異なりオレンジ原料としての用途は世界最大の消費国であり、又オレンジ産果の大型輸出国でもある。国内産量の半分は加工用オレンジの生産は原料として輸出が行われている。

中国の産量は1970年代に240千トンと上り、84~86年には2百万トンと急激に増加。

1. 最近、今日まで4.7倍に押し上げられている。周囲でも同じような動きが報告されている。オランダでは収穫時期に適した品種の改良や栽培技術の向上が原因とされている。近いうちに世界市場において競争力向上の策が可能性ある。

EC国ではスペインに続いて最近の増産の増加が観察される。スペインは1986年1月にECに加入して、ECの内部規程と1996年までの移行期間とを以ての特典を全面的に享受する。しかし、スペイン政府は企業グループと共に、この時期にわたる過渡期間に生産調整のECに支拂中である。スペインはECの主要産国の1つで、ECに占める伝統的産果供給国である。

表 113 トレンジ：世界の生産量

国 別	89/90 平均 (A)	1990	90/93 平均 (B)	(A)(B) 増減%
ブラジル	10,647	12,150	13,197	23.9
米 国	6,607	6,897	8,116	23.6
中 国	2,011	9,700	9,700	133.7
ス ペ イ ン	1,801	2,419	2,626	45.8
メキシコ	1,237	2,200	4,425	96.0
エチオピア	1,170	1,390	1,581	35.1
イタリ-	2,115	1,655	1,945	(1) 8.0
モロッコ	776	810	911	17.4
トルコ	663	600	741	11.8
南アフリカ連邦	989	610	687	42.0
アルゼンチン	595	750	660	10.9
その他	1,149	14,719	12,217	20.3
(注) (A)	(58)	(81)	(116)	(100.0)
合計	38,255	98,900	99,806	30.2

出所: FAO, USDA (注) 93年4月現在合計値

上記の通りでは世界最大のブラジルを含むほかトルコも伝統的トレンジ産国であり、増産は1.3%のペースで存在している。ブラジルの国内生産は大半は工業用ニッケルの輸送にのみ使われるため、トルコや南アフリカ等の輸出国と北半球の過渡期に於いて供給国の中で数に上る。この中で南アフリカ、キューバ、オーストラリア等と競争する。品質からしてトルコや南アフリカは競争力が高いため、生産量が減少する北半球の供給国に数に上る。周囲に於いて増産ペースは80年代前半の90年代当初に於いて100%の増産ペースを記録してきており、90/93年の平均で世界生産の0.23%を占めている。南アフリカに於いてトルコの生産は減少しており、世界の生産国に於いては減少している。

ロ) 世界のりんごの生産輸出

世界のりんごの生産輸出は 1991年より前年より増加しており、92、93年ともほぼ同様の水準にある。世界の生産輸出国の中で最大の生産輸出量は中国で、91年と比較して34.4%増加している。中国に次ぐ輸出量はロシア(11.2%)、92年と比較して1,100千トンに伸びている。中国=大輸出国に次ぐ。モロッコ、アメリカ、南アフリカ連邦、ギリシャ、トルコ、ブルガリア等も主要輸出国となっている。USDAのデータに基づいて TWVの産務報告に基づいて世界のりんごの輸出は次の通りである。

表 114

世界のりんごの輸出 1991-92年

国 別	アメリカ		その他		計	
	1991	1992	1991	1992	1991	1992
スウェーデン	1,150	1,232	1,424	1,165	2,574	2,397
米 国	233	295	604	616	837	1,111
モロッコ	550	360	139	171	689	531
南アフリカ連邦	317	343	122	102	439	445
イスラエル	190	169	153	163	343	332
アメリカ	275	130	198	103	473	233
ギリシャ	303	270	42	42	345	312
ブルガリア	92	69	146	155	238	224
その他	990	*	837	*	1,827	*
計	9,100	*	3,665	*	9,765	*

出所: TWVの産務報告

*: データ無し

世界のりんごの輸出の中で最大の取引量を占めるのはアメリカである。スウェーデンも最大の輸出国となっている。中国はスウェーデンに次ぐ最大の輸出国であるが、1991年には中国のりんごの輸出量が急激に増加している。中国は91年に国内生産量の50%を輸出した。スウェーデンに次ぐ最大の輸出国となった。輸出市場は主にヨーロッパと北米に集中している。南アフリカも輸出を増やしている。中国の国内生産量の半分以上を輸出している。

アメリカのりんごの輸出は TWVの産務報告によると、91年には92千トンの輸出が行われた。ブルガリアはアメリカを中心として1991年に138千トン、92年に97千トン、トルコは11千トン、ギリシャは79千トン、イスラエルは87千トンの輸出が行われた。

5.2.2 アメリカの生産と市場

1. TWVのりんご

Pluvial による Pluvial 栽培の各区域における生産は行われなかった中でのエントリ
 板、リエントス及びツクマツ 北西地域の生産は、国内消費用、生果としての輸出用、及び
 業務用の各粒の目的での生産が行われた。国内栽培面積は果実栽培面積の約4分の
 1に相当する140千ヘクタール。80年代の後半にはその栽培面積の減少が回復した。この
 栽培面積の回復は、レモンとマンダリンにみられ、オレンジとグレープは減少傾向が続いた。
 1981/82年、1985/86年、1991/92年と比較すると、次の如きである。

表 115 単位: Pluvial 栽培面積 (ha)

種類別	1981/82	1985/86	1991/92
オレンジ	68,100	60,700	59,380
マンダリン	28,500	30,050	36,700
レモン	27,000	27,100	29,800
グレープ	16,600	13,650	11,248
合計	140,200	131,500	137,128

出所: 147A - SAGP.

上表にみられるように、オレンジ栽培面積は、80年代前半に17万ヘクタールに減少した。80年代の
 中期に減少したにもかかわらず、80年代後半に回復に向かい、80年代後半の面積は、80年代
 4粒種の中でマンダリンとレモン栽培面積の増加がみられ、オレンジとグレープは減少
 した。オレンジは、この期間中、82/83年をピークとして70,400 haと比較して約15%の減少を見た。これ
 にはミッド-リッジの減少が大きい。オレンジ及びツクマツはともに減少がみられた。
 国内の生産は、エントリ、リエントス、ツクマツ 北西部において栽培された。国内消費
 用、輸出用及び業務用 Pluvial 生産が行われた。

表 116 単位: Pluvial 各別栽培面積 (ha)

別	1981/82	1985/86	1991/92
リエントス	23,750	22,300	24,722
エントリ	18,000	18,600	16,100
ミッド-リッジ	9,300	3,300	2,600
ツクマツ	5,000	5,000	4,260
オレンジ	3,540	3,500	5,452
その他	3,700	3,550	3,000
その他	2,630	2,600	2,300
その他	2,180	1,850	946
合計	68,100	60,700	59,380

出所: SAGP.

アレンVに於けるかんまの生産量は1981/82 ~ 90/91年向と比較20%の増加を記録し、
 種類別ではLEMの生産増加率の最も高く36%、グレート・ブルーが18%、次に次いで
 YLVとマンリ-ナは栽培面積の傾向と同様に減少し、それぞれ6%及び2%であった。
 次表はアレンVに於けるかんまの生産量の推移を示したものである。

表 1.7 かんま : アレンVの生産量

種類別	1981/82	1985/86	1991/92
アレンV	668,000	623,200	690,000
LEM	356,870	421,390	565,000
マンリ-ナ	237,000	243,400	200,000
グレート・ブルー	150,000	177,940	180,000
計	1,411,870	1,465,930	1,585,000

出所: INTA - SAG

生産量、輸出量共に増加した大別アレンVの主要栽培地帯と栽培特性は次の通りである。

1) アレンV及びブルー

- 栽培品種 : 早熟種 27%、中熟種 12%、合計、61%
- 栽培面積 : かんまの栽培面積の 50%
- 生産量及び収収 : 1991年 80.9 千t、1 haあたり 23 t
- 収獲物の仕向先 : 国内市場 60%、海外市場 18%、工業原料 22%

2) ツロマン

- 栽培品種 : アレンV、ブルーの場合と同様
- 栽培面積 : かんまの栽培面積の 19%
- 生産量及び収収 : 1991年の生産量 65.4 千t、収収 : 1 haあたり 30 t
- 収獲物の仕向先 : 国内市場 89%、海外市場 11%、工業原料 0%

3) エントウ、コリエータ、ニゴ-キ、及びブルー、アレンV 各州

- 栽培品種 : 早熟種 ~ HAM LIM - WESTIN、中熟種 WASHINGTON、NAVEL - BUCKEYE
 合計 : VALENCIA LATE PERA、VALENCIA SEGOLES、CALDERON
- 生産量 1991年 : エントウ、コリエータ及びニゴ-キ計 415.5 千t、ブルー、アレンV 52.5 千t
- 収収 : " " 29.5 t/ha、18 t/ha

収獲物の仕向先 (%) :

	エントウ、コリエータ	ニゴ-キ	ブルー、アレンV
国内市場	56	19	80
海外市場	19	1	17
工業原料	25	80	3

表 118 77Vの土壌推定

水取年次	水取面積 1000ha	生産量 100万kg	平均収取 kg/ha
1984	632.0	64,613.0	102.255
85	663.1	71,071.5	107.180
86	707.3	66,872.2	94.478
87	725.6	73,568.8	101.390
88	815.8	76,471.6	93.733
89	853.7	86,110.3	100.868
90	928.3	86,148.1	92.805
91	980.8	94,512.3	96.366
92	986.5	98,285.7	99.629
93	745.8	85,490.2	114.623

出所: 1992

表 119 77Vの土壌推定 (1993年) ()の単位

地域及び州別	水取面積 1000ha	生産量 100万kg	平均収取 100kg/m
北部地区	1.1	1123.7	86.2
東北地区			
青森県	38.5	3,933.0	102.2
岩手県	39.2	2,663.7	68.0
秋田県	9.3	703.9	-
小計	87.0	7,300.6	83.9
中西部地区	8.3		
南東地区			
千葉県	531.2	68,775.0	129.5
茨城県	58.1	2,535.2	66.5
栃木県	28.2	1,421.0	59.5
群馬県	2.4	163.1	-
小計	599.9	72,894.7	121.5
南部地区			
宮城県	27.9	2,301.3	82.5
福島県	9.6	1,164.9	-
小計	37.5	3,466.2	92.3
全国計	745.8	85,490.2	114.6

出所: 1992

1992 (77Vの土壌推定) の統計の収取と生産量は、現状と同等の条件で推定した。生産量は、1ha当たり1kgの収取を1ha当たり1kgと仮定して算出した。国内の土壌推定は、表現として平均値 40.8kg/ha と推定された。1ha当たり1kgの生産量は、平均値として 250万kgと推定された。国内の土壌推定は、1ha当たり1kgと推定された。

表 120

Fiji VFA 濃縮バナナペースト輸出推移

年度	数量 1,000kg	金額 FOB 100円/kg	輸出平均単価 US\$/kg
1982	521.1	573.4	1.100
83	553.1	608.0	1.099
84	904.8	1,414.5	1.563
85	484.8	748.9	1.544
86	808.3	682.2	849
87	755.0	830.5	1,100
88	663.6	1,143.3	1.724
89	723.9	1,019.0	1.407
90	953.9	1,468.4	1.539
91	913.5	899.9	985
92	967.2	1,052.8	1.088
93	1,165.2	826.2	709

出所: CACOA, DECEX

表 121

Fiji VFA 濃縮バナナペースト輸出先別 (数量)

1,000kg

輸出先国	1991	1992	1993
オランダ	331.9	350.5	454.0
米 国	223.3	331.6	339.1
ベルギー	112.7	127.8	196.3
日 本	24.9	35.6	63.0
韓 国	39.9	36.0	34.0
英 国	10.8	21.2	25.1
カナダ	59.9	19.6	10.1
ドイツ	22.3	19.1	2.9
フランス	3.8	4.9	2.3
アメリカ	3.3	4.0	5.0
オーストラリア	11.6	4.3	6.6
その他	14.4	19.0	25.8
計	913.5	973.6	1,165.2

(金額)

オランダ	322.5	373.9	318.3
米 国	282.5	357.8	262.8
ベルギー	106.8	144.8	121.6
日 本	25.7	51.4	39.1
韓 国	41.8	41.3	25.0
英 国	10.8	20.8	17.4
カナダ	53.8	19.0	7.0
ドイツ	22.7	11.5	5.3
フランス	3.9	5.2	5.0
アメリカ	3.9	4.9	7.1
オーストラリア	12.8	3.1	3.5
その他	12.7	19.6	17.1
計	899.9	1,052.8	826.2

ハ) パラグアイ

表 122

オレンジの生産推移

年次	面積 1,000 ha.	栽培本数(1,000本)		生産量 1,000 t
		生産中	生産前	
1982	11.6	4.3	1.4	352.9
83	11.6	4.3	1.4	356.5
84	11.7	4.4	1.4	352.8
85	11.8	4.4	1.4	341.1
86	12.0	4.6	1.5	274.9
87	12.2	4.9	1.2	352.3
88	12.2	5.1	1.3	363.8
89	12.2	5.1	1.3	364.3
90	12.2	5.1	1.3	366.3
91	10.2	2.4	*	177.2
92	10.2	2.4	*	178.7

出所: PRODUCCION AGROPECUARIA - SINTESIS ESTADISTICA

*: 推定値

注) 91年及92年の栽培本数は、推定値である。

表 123

オレンジのパラグアイ生産比率(1992)

地域別	面積 1,000 ha	栽培本数(1,000本)	生産量 1,000 t
イタパ	3.1	1,032.9	29.9
サン・ロドリゴ	0.8	173.4	19.0
カアブラス	1.3	323.0	26.7
ティフ・ボタ	1.2	313.3	20.4
ゴビエラ	0.6	160.9	17.5
その他	3.2	819.0	55.2
全国計	10.2	2,822.5	178.7

出所: PRODUCCION AGROPECUARIA - SINTESIS ESTADISTICA

5.3 ぶどう

5.3.1 キューズ-11の生産と市場

キューズ-11の4ヶ国におよぶぶどうの生産量の年間平均の約3分の1は大半がぶどう酒用原料。少量が食卓用と採りて消費される。ぶどう酒の生産は年間230万トンの前年より

国内で最大の生産国はフランスで、国内生産量の80%が同国に集中する。フランスは全体の10~15%、残り1がイタリアに年々5%~10%のシェアを奪取する。イタリアの生産には見よるものがある。

フランスの生産量の約15%が高級ぶどう。80%は工業原料用、5%は食卓用及びぶどう酒用に消費される。全生産量の95%はぶどう酒用原料とされる。フランスのぶどう酒の市場も同様の状況で、全生産量の97%は工業原料に向かっている。

フランス国内では、ブドウとブドウ酒の生産は国内ぶどう生産の90%に集中し、工業原料の割合は95%に集中している。又国内の消費はフランス、ドイツ及びイタリアの3ヶ国に集中し、消費量の約250万トンの平均生産とされている。

国内栽培面積は、209千ヘクタール(92年)で36ヶ年連続で栽培面積の減少が続いている。1ヶ年あたりの栽培面積は0.5ヘクタール。ぶどう園の72%は栽培面積5ヘクタール以下の小面積で占められている。1ヘクタールあたりの収量は10トンの程度である。

フランスでは、ブドウの品種は、フランスとドイツの品種が主である。フランスの品種は、ブドウの栽培面積の約57%を占め、そのうちフランスの品種は40%の栽培面積を占め、16ヶ年連続で栽培面積の減少が続いている。同様にフランスの栽培面積は2.2ヘクタール、1ヘクタールあたりの収量は12トンの程度である。

国内産の67%はぶどう酒用原料、残り33%は食卓用に供給される。1994(フランス統計院)のデータによると、国内年間消費量は780~800千トン、その90%はフランスの品種である。

国内生産量の大半はぶどう酒用原料に用いられる。年間約260万トンの生産量がある。そのうち大部分(97%)は国内市場に向かうが、3%は輸出される。国内1人あたりの消費量は、1994年のデータと比較して、消費量は減少している。国内供給不足を補完するために、年間約10万トンの(国内産の4%)の輸入が行われている。輸入はフランス、10%、ギリシャ、25%、スペイン、65%の割合で行われている。

アメリカ合衆国に於ける牛肉の生産は、モントゴメリー (16%)、カネオ-社 (65%)、サニタ (5.5%)
 及び 20-2P (6%) の 4 社に集中している。牛肉の消費量は、牛肉に集中している。
 国内最大の消費市場はモントゴメリー社である。

牛肉の生産は年間 113 万トン、その大半 (97%) は牛肉の原料である。残りの 1% は牛肉の消費
 である。牛肉の消費量は、約 85 万トン/年、その 99% は国内市場に由来している。1 人当りの
 消費量は 30kg で、国内消費量は、牛肉の生産量に匹敵している。国内消費量の不足を補うために、牛肉の
 生産量は、(牛肉の生産量の 2%) の輸入が行われている。最大の輸入先は、アメリカ合衆国、
 70%、カナダ、20%、その他 10% の割合で輸入されている。

アメリカ合衆国の牛肉の生産は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、牛肉の生産量の
 約 90% を占めている。

アメリカ合衆国は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、牛肉の生産量の
 約 90% を占めている。牛肉の生産量は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、
 牛肉の生産量の約 90% を占めている。牛肉の生産量は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、
 牛肉の生産量の約 90% を占めている。

アメリカ合衆国は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、牛肉の生産量の
 約 90% を占めている。牛肉の生産量は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、
 牛肉の生産量の約 90% を占めている。牛肉の生産量は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、
 牛肉の生産量の約 90% を占めている。

国内最大の生産国であるアメリカ合衆国は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、
 牛肉の生産量の約 90% を占めている。牛肉の生産量は、牛肉の生産量の約 20% を占めている。牛肉の国内消費量は、
 牛肉の生産量の約 90% を占めている。

表 124 牛肉の生産と消費の状況 (単位: 1,000 万トン)

国	1989	1990	1991	1992
アメリカ合衆国	2,292.0	1,774.0	1,705.0	*
カナダ	274.0	311.0	204.0	256.0
オーストラリア	85.0	94.0	89.0	80.0
その他	*	*	*	*
計	2,656.0	2,179.0	1,989.0	*
世界生産量	*	27,950.0	24,650.0	17,979.0

* 7-7-96

5.4 カヴ-トナ

5.4.1 ブラジルの産地と市場

カヴ-トナはブラジルの東北部に生産され、大規模な石川の人々のアフリカやインドに輸出され、またアフリカやインドに輸出される。世界の産地帯はブラジルのパラナ州、モザンビーク、タンザニア及びインドに集中しており、1977年以降、アフリカ大陸の産地帯は最大である。1977-85年間はアフリカの産地帯の増産が顕著であった。アフリカの産地帯は今後の付帯の見込みがあるが、ブラジルで政府による植林奨励の枠内にあるため、調査分野でも急速な進歩が期待される。産地帯の維持に力を用いる見込みがあり、海外市場は伸びるであろう。

世界のカヴ-トナは供給力が増え、アフリカの産地帯は減少するものの、新しい産地帯はバングラ、インドネシア、スリランカ及びフィリピン等に出現する。供給量の増加傾向にある。

表 125 世界のカヴ-トナ産地帯

国別	1970-72		1980-82		1990-92 推定	
	1,000ト	%	1,000ト	名	1,000ト	%
ブラジル	26.7	6.8	77.9	25.1	132.5	29.0
インド	60.0	15.3	125.7	37.1	137.3	30.0
モザンビーク	171.0	43.5	59.5	17.6	30.0	6.6
タンザニア	111.7	28.4	99.1	14.5	22.7	5.0
インドネシア	20.3	5.2	13.7	4.1	11.4	2.5
その他の国	3.0	0.8	12.2	3.6	123.3	27.0
世界計	392.7	100.0	337.8	100.0	452.2	100.0

出所: EDIBLE NUT MARKET REPORT. * 補填数値は推定値である。

ブラジルの国内生産は20州で生産され、そのうち東北部に99.7%が集中し、東北部の中ではセアラ、パラナ、ゴイアス、ミナスジェリス、バイーア及びバイアの5州が全国生産の97.5%を占める。このうちパラナ州は最大の産地帯である。1970年代は植林の奨励による産地帯の増加、政府による産地帯の奨励、80年代に入ると急速に拡大した。

国内にはカヴ-トナの産地帯は24工場があり、年間180千トンの精製加工を行う。また、油や菓子の原料と加工品の処理工場は8社で、年約40千トンの処理を行う。このうち、カヴ-トナ精製工場の80%はセアラ州内に集中している。

表 127 世界とXVZ-IVの牛肉生産量

区別	1989	1990	1991	1992	85/90平均
XVZ-IV					
PIVシン4V	2,585	2,686	2,686	2,607	2,635
ブ7VIV	3,800	3,600	3,700	3,800	3,700
パ7777	*	*	120	130	130
シル777	*	359	320	320	350
小計	6,385	6,645	6,826	6,857	6,515
世界生産量	48,939	49,056	48,921	47,979	48,747
XVZ-IV割合(%)	13.2	13.5	13.9	14.3	13.4

出所: DIAGNOSTICO DE COMPETITIVIDADE DEL MERCADO. * 7-7-7L.

世界の牛肉生産増加率の肉全体の増加率(1.0~2.0%/年)よりも低く、その増加率は牛肉の市場の一部を奪われつつある。又工業先進国における増加率(1.2%)は南米途上国における増加率(2.8%)に下回っている。先進国の中でECの割合が最も多い(1.7%)に比べて、米国は80年代以降0.6%の増加率に停滞してきている。

世界最大の生産国は米国(1年約10億頭)に次いでいる。これは従ってECが8.0億頭、CEIとXVZ-IVが7.0億頭と続く。XVZ-IVの中で7.9億頭の生産(3,700万頭)が最も大きい。PIVシン4V(2.6億頭)が続き、シル777は7.7億頭、パ777は最も少ない生産規模である。XVZ-IVの生産は南米大陸全体の85~90%を占める生産の14%前後である。

最近数年間ラテン・アメリカの熱帯地域は、XVZ-IVやPIVシン4V諸国(特に中国及び日本)と共に高度の飼育技術の導入と生産の増加と同様である。XVZ-IVの4国とも競争力を高める飼育技術の向上とそれによる畜産の増加と、そのレベルはPIVシン4Vよりも高い。つまり、シル777及びパ777のレベルは低い。伝統的に20ヶ国とも新しい技術の導入は公共の研究機関を通じて行われてきたが、先端技術の導入によって民間部門の役割も見るべきである。1990年代の10年間の公共部門の減少と民間部門の増加は投資の減少傾向にある。

需要状況

世界の肉需要は生産量の増加と並行して、購買力の高さ、工業先進国での需要が集中する工業先進国での1人当りの消費量が90~110kgへと拡大されてきた。南米途上国では年約20kgにも達してきている状況にある。工業先進国でもっとも多くの消費量を持つ肉は牛肉、豚肉、鶏肉、羊肉及び山羊肉である。従って、この消費増進と拡大

は 牛肉消費の増加によって変化して行く。

1人当り牛肉の消費量は日本を唯一の例外として世界的に減少している。日本は国民の購買力の高さに加えて食習慣の欧米化に伴って牛肉需要の増加が不十分な。牛肉消費の減少に反し、脂肪分の少ない精肉消費の増加がみられる。

1) 市場

世界の年間供給量 45~50 百万トンの中、牛肉は 8~10% (年間 40~44 百万トン) のみが国際的に取引されている。最近数年の供給量の増加率は貿易量の増加率と下廻っており、80~90 年間の供給量の増加率は年平均 1.7% にあつたに反し、貿易量の増加率は 2.7% にあつた。この期間中、世界の牛肉は工業先進国が平均 2.0% の増加とみられるに反し、南米途上国は 2.4% の増加と 4% の増加を示した。世界の貿易量中、先進国は輸出品の 83%、貿易量の 76% を占めた。

貿易量の低下は市場の不健全であることが示唆されており、輸入国の国内需要を補う手段として少量の輸出を行っている。その量は年々減少し、最近では市場に乏しい。又輸入国政府の肉市場に対する政策により、輸入量も上下し、輸出国側の輸出収入を増加する傾向を示している。このように加えて輸出国側の経済情勢 (インフレ、為替レート、利息等) が市場に更なる不安定をもたらしている。

2) 世界の主要輸出国及び輸入国

オーストラリア、ニュージーランド、アルゼンチン、ブラジル及びウルグワイが伝統的に牛肉の輸出国であり、この5ヶ国は世界の貿易量の50%以上を占めている。ただし、牧畜の生産コストと輸入国側の市場条件による貿易量の毎年変化が

ECは70年代の中期よりむしろ主要な輸出国の1つであるが、70年代の輸出側には裏面、強力的補助の助けを以て年間5.5%の成長を示し、現在では最大の輸出国となっている。ECが輸入側の輸出側にも、ブラジルの比較的同等の競争を確保できるアルゼンチンが輸出国としての位置を後退し、ウルグワイは政府の政策による輸出を伸ばしている。ブラジルの80年代は数年間におよび500万トンの輸出を行ってオーストラリア、CECに次ぐ主要な輸出国となり、アルゼンチンとの位置を奪った。この間、ブラジルの国内生産量に占める輸出量は、

合は 5% 以下 10~20% へと増加しており、又他の諸国(オーストラリア、フィリピン)と異り、牛肉も加工肉も多く輸出している。

世界最大の輸入国は米国で、世界の輸入の 25% を占めている。主要供給国はオーストラリアとヨーロッパであり、ブラジル、フィリピン、ウルグアイは衛生上の問題(ブタ-4)から畜産肉のみを輸出している。日本は現在世界の最大の輸入国となっており、オーストラリア、米国及びヨーロッパより供給を受けている。

以上の通り、キルコス-IV の輸出はブタ-4 の問題で前年より減少している。現時点に於ける牛肉の国際市場は、輸出に対する強力的保護下にある EC とその輸出国としてのオーストラリアが支配している。

表 128¹ 世界の牛飼育頭数

地域別	1980	1985	1990
ア ヴ ア	475.9	368.8	393.9
南 米	213.8	252.1	263.9
北 米	176.5	182.3	160.1
アフリカ	171.9	176.2	187.8
ヨーロッパ	134.5	132.2	124.0
旧ソ連	115.4	121.0	118.4
大洋州	39.0	36.3	31.2
世界計	1,327.0	1,268.9	1,279.3

出所: FAO

表 129 世界の牛肉生産量

地域別	1980	1985	1990
北 米	12,179	12,253	13,905
ヨーロッパ	10,799	11,002	11,091
旧ソ連	6,673	7,400	8,700
南 米	6,727	6,734	7,764
アフリカ	4,998	3,653	5,341
アジア	2,971	3,279	3,816
大洋州	2,052	1,768	2,183
世界計	46,394	47,089	52,800

出所: FAO

表 130 諸国の牛肉消費量

国別	1980	1985	1990
米 国	10,897	11,690	11,048
旧ソ連	7,046	7,880	7,389
EC	7,006	7,656	7,045
ブラジル	1,988	1,900	2,810
フィリピン	2,391	2,490	2,272
日本	602	790	1,067
カナダ	986	1,030	1,007

表 111 主要国の以当年平均肉消費量

kg

国 別	1980	1985	1990
アメリカ合衆国	86.0	82.0	71.0
旧ソ連	78.0	67.0	59.0
米 国	47.9	47.0	44.2
オーストラリア	50.6	40.7	38.1
ニュージーランド	58.1	35.5	32.5
カナダ	41.0	40.6	37.8
イタリヤ	25.9	24.9	21.5
南アフリカ連邦	19.5	18.0	17.8
ブラジル	16.3	12.0	18.7
日 本	5.2	5.1	8.8

出所: FAO, GATT

表 112 世界の牛肉輸出と牛肉輸入

1000 ㌧

国 別	1980	1985	1990
オーストラリア	845.5	692.0	1009.0
イタリヤ	642.0	805.0	994.0
米 国	112.5	151.0	956.0
アメリカ合衆国	469.0	260.0	918.9
ニュージーランド	302.8	363.0	859.0
ブラジル	183.2	530.0	230.0
オランダ	117.0	134.0	192.0
カナダ	150.5	113.0	110.0
旧ユーゴスラビア	75.1	51.0	27.0
コロンビア	54.1	9.0	15.0
その他	1,119.0	1,267	573.1
世界計	4,079.7	4,379.0	4,375.0

出所: FAO, GATT

表 113 世界の牛肉輸入量と牛肉輸出

1000 ㌧

国 別	1980	1985	1990
米 国	1167.3	948.0	1069.0
日 本	189.9	216.0	537.0
イタリヤ	355.0	489.0	399.0
旧ソ連	457.7	510.0	250.0
ブラジル	45.8	48.9	195.0
カナダ	87.5	110.0	188.8
エジプト	78.2	240.0	117.8
オランダ	35.0	2.0	90.0
中 国	11.3	32.0	38.8
南アフリカ連邦	35.1	18.0	23.1
その他	1,276.8	1,566.6	1,334.5
世界計	3,989.6	4,180.0	4,243.0

出所: FAO, GATT

6.1.2 XLCOS-IVにおよぶ生産と市場

1) 生産、推定消費量及び輸出

XLCOS-IV 構成国におよぶ牛肉卸肉は各国のPIB(国内総産)構成に直率に比例して輸出し、輸出による外貨獲得の面から自給の直率に比例して牛肉卸肉を消費する。

XLCOS-IVにおよぶ牛肉卸肉の生産は約210百万頭で世界飼育頭数の17%に占め、南米大陸では90%の集中度がある。

毎年、屠殺数はアルゼンチン、ブラジル、12百万頭前後であり、パラグアイとウルグアイの両国を合算して2百万頭程度に達する。屠殺による牛肉の生産量は平均の直率で約600万トンを、世界の屠殺量の約12%に相当する。アルゼンチンとブラジルは天=2.7百万トンの屠殺を行っており、XLCOS-IV全体の91%に占める。

屠殺半頭あたりの直率は平均212kgで各国はほぼ同様であるが、保有頭数に於ける屠殺数の割合は国によって大きく異なり、アルゼンチンでは約23%と最も高く、ウルグアイは約15%、ブラジルは約9%と低い。

各国の牛肉価格の変動はほぼ可成り安定しているが、20年間の供給面は季節的な変動がある。中でもブラジルにおよぶ季節的な供給の変動は大きく、収穫期の後半には生産が供給を行わなくなり、調達期には不足し、冷凍工業の活動は落ち、施設の近代化と価格低下が促進される。

11ヶ国のうち最も国内市場が最大の傾向であり、生産した牛肉の約90%は国内で消費される。ウルグアイの屠殺量の60%は国内市場、40%は海外市場向けである。

国民の1人当り年間の牛肉消費量はアルゼンチンとウルグアイが世界的にも上位に属する高いレベルにある反面、ブラジルは低く、両者共に大に差を縮めつつある。パラグアイはなお中位の位置にいる。

表 124 XLCOS-IVにおよぶ牛肉の1人当り平均推定消費量 (kg/人/年)

年次	アルゼンチン	ブラジル	パラグアイ	ウルグアイ
1989	66.0	17.9	30.6	67.0
1990	71.0	18.7	32.0	59.0
1991	73.0	18.0	32.0	59.0
1992	73.0	21.3	32.0	59.0

出典: ESTUDIO DE COMPETITIVIDAD

